

522
186

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



庭家-校學
方仕の演講新伽あ

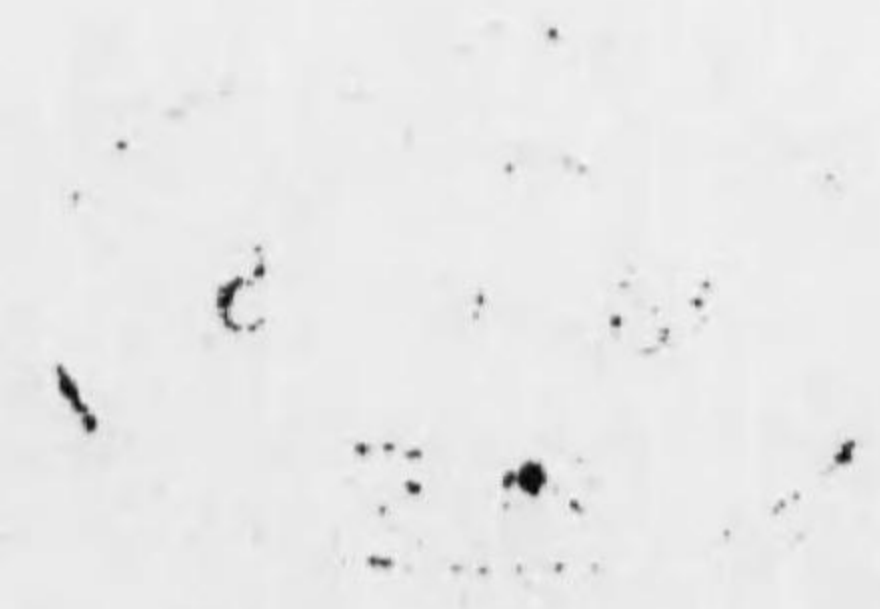


行發堂雪松

522-186



大 阪
石 井 書 局 行 發
大 正
13. 4. 15
交 内



はしがき

教訓的の講演に代ふるに、お伽噺を以てし、且つこれを各種の團體に應用せんことは、著者の多年研究せしところなり。而して今日に至りて稍其要領を得、實際に應用して、得るところあるを識る。しかも各團體の種類によりて、其趣を異にし、講演の様式に工夫を要すべきことを覺る。いさゝか一書を公にして、一般の經驗を述べ世の同志諸君と、共に一層研究の歩を進めんとす。世の識者幸に、諒とせられんことを。

大正十二年十二月

可笑庵しるす

指演 教訓お伽口演集目次

(一) 一般講演の仕方……………一

一、音聲……………一

二、言葉遣ひ……………三

三、會話……………四

四、表情……………四

五、態度……………六

六、身体……………七

七、着眼……………八

八、手(卷尾)に活用の……………

實例を示す……………九

(二) 各種團體氣分の差異及び實際講演上の注意……………一一

(三) 例話……………一三

◆ 小學校の部……………一三

一、魔法の失敗……………一三

二、おこん狐……………二八

三、三ちゃん……………四二

四、鬼童丸……………五九

五、名劍稻荷丸……………六九

◆青年會の部……………八三

一、堪忍袋……………八四

二、酒の害……………九七

三、頓智裁判……………一〇三

◆處女會及工女の部……………一一二

一、蟹姫八重子……………一一二

二、まゝ母の改心……………一二三

三、機織りお富……………一三四

◆軍人團の部……………一四二

一、血ぞめの手帳……………一四二

ホ 波の動くを表す場合

ヘ 障子等をあくるを表す場合

ト 物の水中に飛び込むを表す場合

チ 犬の尾を振るを表す場合

リ 山の形を表す場合

ヌ 上より袋等をかむせるを表す場合

ル 雨の降るを表す場合

オ 大砲等を打つを表す場合

ワ 人を毆打するを表す場合

カ 電光を表す場合

二、聯隊旗の行衛……………一五五

◆敬老會の部……………一五九

一、清水の觀音……………一五九

二、釋迦と提婆……………一七〇

三、愛の草だね……………一七八

四、藤八爺さん……………一八八

(四)手の活用實例……………一九三

イ 海原又は廣野を表す場合

ロ 舟などの進行を表す場合

ハ 舟に波の切らるゝを表す場合

ニ 汽車の發車を表す場合

◎附録

講演教育的の一口噺……………一九八

一、石屋と醫者……………一九八

二、生活一變……………一九九

三、説教の聞そこなひ……………二〇二

四、辨財天かん……………二〇三

五、九郎義經……………二〇四

六、柿本人麿……………二〇七

七、鉄盗人……………二〇八

八、はきもの無用……………二一〇

九、註文違ひ……………二一〇

十、田分け坊主……………二二一
 震災お伽噺……………二二一
 春雄の行衛……………二二三
 春雄の兄さん……………二二三

目次終

講談 指針 教訓お伽口演集

可笑庵秋月著



(一) 一般講演の仕方
 一、音聲

音聲の講演に及ばず影響は頗る多大である。しかし、音聲は生得によるもので如何んとも、なし難いのであるが、修養練習の仕方によつては、大にこれを左右するここが出来来る。

然らば「ごんな音聲がよいか」といふに、
 一 壯重で、明瞭

で、圓滑で、餘韻を有し、滋味を帯んだ、音聲が最も講演に適して居るのである。感高い聲や、がらく、聲や、黄や、緑の聲でしやべり立てられたら聴者はたまつた者ではない。

「如何にして練習するか」
温度の低い空気の中で音聲を練るのが最もよい方法である。講演ならば寒中寒稽古式に一ヶ月もやれば、余程變化を見る事が出来る。
尤も不斷の練習が第一だ、自己の音聲の欠點を自覺して常に矯正すべく心懸ければ自然と善良になるものである。
併し語るは口や、聲ではなく、人格である。

二 言葉遣ひ

言葉は緩急適度であるべきだが一般に、稍緩かなのを良とする。訛言などを避け標準語により、解る程度で、高尚なのを尊ぶ。無意味にせき拂ひをなし、同じ言葉を屢々繰り返すのは講演の拙なる表徴である。
聴者の種類によつて遅速難易の別を考え、變化の妙を得るは座を重ねたる者にあらざれば不可解の問題である。が一般演者の大に考慮を要すべき問題である。

三 會話

會話については色々の説をなす者があるが、講演の重大要素で演者の頗る研究を要するものであることは、論

を俟たない。

會話の主とするところは、男と女、老人と若者、長上と目下、主人と召使、等の區別を明に表はし、しかも芝居のセリフ聲色までに陥らないやうにすることが肝要であると思ふ。要は演者が其人物になつて話せば會話は自然によく行くものである。

四 表情

表情の巧拙は聴者の心を引きつくるか否かの重要問題である。

眞の表情は演者の同情の力によつて生ずるものである。楠公を語るるとき眞に楠公に同情する時、否尙一步進んで

楠公其人となりて語る時深い強い表情が出来る。

かくして聴者を泣かしめ、怒らしめ、喜ばしむるここが出来来る。

一つ注意すべきは、可笑材料を取扱ふ時、演者自ら笑

ふのは禁物である。

自ら笑ふ時は甚だしく滑稽美を損するものである。

又こと更に面貌等を滑稽にし、不自然なる動作をなして

聴者を笑はしめんとするが如きは巧妙なる手段ではない。

徒に講演をして野卑に陥らしむるものである。

要するに眞の表情は眞の同情より生ずるものである。

五 態度

人の心を動かすことの多少は人格の高下による。而して態度は人格の表現である。

演者の態度は軽浮を避け、**壯重沈着**で、**泰山の大原**に横はる如き概なかるべからずである。

そはくした態度で演壇に立てば、**第一聽者の心を惹くに困難**である。そしてそれが**講演を不成績に終らしむる原因**となるのである。

演壇上に立つては「**天上天下唯我獨尊**」の**意氣が最も必要**である。

演壇に登る前時に心の**落付きを欠く**ことがある。かゝる

折には**深呼吸等**を行ひ、よく心を**落ち付け**、**静かに歩み**て演壇に登り、最も**適当な位置**を占め、**勇士が戦場に仁王立ち**になりたるの**勇氣**を以て**直立し**、**一場を一瞥**して**静かに一禮**すれば**自然と態度は整ふ**ものである。

六 身體

演壇上に立つては**先づ静に直立不動の姿勢**

をとり、**下腹部に力を入れ**、**右足を半歩程前に進め**、**兩手は下腹の前に兩掌を重ねて置き**、**テーブルを用る時**もこれに**寄りかかるのは姿勢をくづす基**でよろしくない。如何なる場合にも**敢て動搖しないやうに構え込まねばならん**。但し**固くならずゆつたりとした姿勢が最もよい**ので

ある。

變化の場合には腰より上に止め下肢を用るのはよろしくな
い。

七 着眼

敢えて全場に目をくばらんとするは頗る藝術味を損し
て面白くない。又全然聴者と隔たるは忌むべき事である。
上は氣を配り、中は目を配り、下は言葉を配る、といふ
事がある。言葉を配り、注意を促して静寂を保つのは、
演者の下なるものである。目を光らせて全場を凝視し注
意を集めんとするは中、氣合で氣合を制し全場の聴者を
自己に惹きつくるを最上の策とすべきである。

上目、伏し目、テーブル目（絶えずテーブルの面を見る）
共に演者の避くべき事である。

會話の場合には對者にちらりと目を注ぐ、交換の場合
にちらりと聴者に目を注ぎ、他は場合に應じて變化自在な
るべきである。

「目は口程にものを言ふ」といつて、目にて語るべき場
合が中々多い、眼の遣ひ方は演者のゆるがせにしてなら
ない事なるは以て知るべきである。

八 手（巻尾手の活用實例参照）

多くの講話者や、教授者を見るに、手の置き場所に困
じ、或は後ろに隠し、或はポケットに入れ、徒らに邪魔

物扱ひにしてこれが遣ひ方を少しも研究しない者が多い。
手は最上の教便物であり、武器であり、形容具である。
利用の方法を講じたなら講演の大半を助くるものである。
不用の時には下腹部の前に掌を重ねる如く置くのが最も
よい。
用る時には腋下をあくる如く全部体よりはなし大きく動
かして形容の助けとすべきである。
前臂ばかり動かすのは形容が縮少して面白くない。
形容の方法は事により場合によつて演者の工夫研究に俟
つより仕方がない。
要するに手の遣ひ方は演者の考究を要する重要事である。

(二) 各種団体気分
各種の団体には、それ／＼違つた、心理状態がある。
たとへば、小学生は、想像的で、奇を好み、青年は感情
的で眞を好み、青年以上は意志的で利を好み、老人は宗
教的で信を好み、婦女は一般に頗る感情的で特に悲哀美
を好む。

故に實際講演上にもそれ／＼異つた、注意を要する。
それは、材料の選擇と實演上の手加減である。
例へば、小学生には人間界にないやうな、出來事の含
まれた材料を擇び、實演上には、手まね身ぶり形容を多
くし、青年団体には、實際的の材料を選擇し實演上には

會話表情等に力を注ぎ、青年以上には經濟的、實際的の材料を選び、實演上には極めて嚴正なる態度を要とする。老人には宗教的材料を選択し、實演上には、寧ろお説法口調、説教的態度が一般に歡迎せられる。婦人には、感情的の材料を選び、實演には表情法を主とすべきである。これは極めて、大体なる區分法で、小學生も上級に至れば、青年に近く、青年にも中青に近い程度の者の有るは言ふまでもない。要するに團體の種類によつて、材料の選擇を異にし、實演上に手加減を用ゐることを忘れてはならない。

(三) 例話

◆ 小學校の部

一、魔法の失敗

太郎さんと、次郎さんとは、大そう仲のよいお友達でありました。學ぶにも遊ぶにも、いつも二人は一つしよでした。或日曜のこと、折しも春のま中で、空はよく晴れ、雲雀は歌ひ、野原には、色々な草花が咲き亂れ、まるで五色の毛氈を敷いたやうでありました。こんなよい日にござうして家にちつとして居られませう。二人は連立つて家を出ました。水晶をとかして流したかと思はれるやうな水のきれい

な流れの緩かな小川のほとりを、二人は唱歌を歌ひながら北へくへ行くと行くのでありました。

小川の土手には赤や黄や、色々の草花が影を水にうつして居る。きれいな小魚は列をなして、泳いで居ます。

二人は川にそつて五六町來ました。こゝは深い山のすそで、廣い野原である。

ずつと向ふの水車ごやの裏に青い高い木が十本ばかり生えて居る外に木は生えてゐなくて一面に草花が色を競

つて居ます。二人は言ひ合したやうに草花を摘み始めました。太郎

さんは赤い花、次郎さんは黄い花

しばらくして二人共大きな花束が出來ました。二人は互に自分々々の花の色を譽めあひました。

そして珍らしくも聲高く争ひました。次郎さんは、尙も黄い花をつむ爲深い山の方へ進んで行

きました。太郎さんはだまつて、其場で赤い花を摘んで居りました。

暫らくして太郎さんは、ふと顔をあげて見ました。そして見るく顔色は變りました。それは、次郎さんの姿

が、あたりに見えないからです。太郎さんは思はず手に持った花束をこり落しました。そうして、そこら一面駆け廻つて、

「次郎さん次郎さん」

と呼んで探したが、次郎さんの姿は更に見えませぬ。

高い深い山の麓まで探しあぐんで、ぼんやり立つた時

太陽は西の山に傾き、ねぐらに歸る山鳥二三羽打連れて

「かあ〜〜」

「次郎さんはどうしたんだらうなあ、それ共先に家に歸

つたのかしらん」

と力なく一人言をいつて太郎さんはとぼ〜家路をさし

て一人歸りました。

お父さんやお母さんに其事を話したら、お父さんは、

「それは心配なことだあの山では昔から一年に一人づゝ

はきつと行衛の知れない、子供が出来る」

とおつしやつたので身をふるはして驚いた。

そして大急ぎで次郎さんの家へと駆け出した。途中で

次郎さんのお父さんが探しにあらつしやるのに行き合ひ

ました。

聞けば次郎さんはまだ歸らないとのこと。

太郎さんは大きな聲を立て、泣き出しました。そして

野原で争つた事がしみる悪かつたと思はれました。

次郎さんの家では大さわぎ、隣り合ひの人々は提燈や

たい松をともして夜中探したが姿は見えん明る日も、其

明る日も探したが、やはり姿は見えん。

呼鳴次郎さんはどうしたたらう。

次郎さんのお家ではもう死んだものと、諦らめて、毎日泣いてばかり。

諦らめられないのは太郎さん、自分と一しよに遊びに出で失つたものを、どうして此まゝにしておかれやう。

「どうしても探し出さねばならない」と決心しました。

なくなつてから五日目の早朝太郎さんは、父母に無理に願つて、辨當の支度をして戴いて次郎さんの行衛を探すために家を出ました。

だんく進んで、野原を通りぬけ高い深い山の中に入

りました。

山の中は晝もうす暗く物すごい程大木が生ひ繁つて居る。太郎さんは心を勵まし、奥深く進みました。行けごもく次郎さんのそれらしい物は見當らず、聞えるものは、鳥の啼き聲、谷川の水の音、梢をならす風の音ばかりであります。

探しあぐんで、かたへの石に腰かけたとき、吹いて来る風は何とも言へない涼しさでありました。だいぶお腹がすいたので、用意の辨當をこり出して食べました。お腹がふくれると、思はず眠けを催したので其石にもたれて、居眠りを始め、つかれにまかせてぐつつすりねこん

でしまひました。

暫くして襟元から、水を注ぎ込まれたか、と思ふほどぞつぞつして目を開いて見ると、傍に一人の老人が立つてゐました。

銀の針金を束ねて垂らしたやうな白いひげ、星のやうに光る眼、ごう見ても普通の人は思はれません。

太郎さんは不思議に思つて、じつと見つめてゐると、老人は静かに口を開ひて、

「これ少年私は此山の明神だがお前の友達思ひの心に感じて、力を添えてやる、お前の友達は、此山奥に住む魔法使ひの婆さんに捕はれて金魚に形を變へられてゐる、

もう二三日で命が危い。此桃を其婆さんに食はせるご魔法の力がなくなる。又危い時には、此鈴を振れ。そうすれば又私が出て、助けて上げる。」

と言つて三つの桃と、一つの鈴を下さいました。

太郎さんは頭を下げ、又上げて見ると老人の姿は見えませんでした。

三つの桃と、一つの鈴はそこに置いてありました。

太郎さんは、それを持って山の奥へと進んで行きました。七八町も行たかと思ふ山崖に美しい黄色い花が、咲いてゐました。

あまり美しいので、其花をこらうと思ひ、其前の岩に

足をかけると、「がたく」動くではありませんか、不思議に思つて力を入れ押しして見ると、其岩はくるり廻つて屏のやうにあき其處には大きな洞穴が明いてゐます。そして中から何とも言へぬよい音の音楽が聞えて來ます。太郎さんは中に入つて進んで行くさ向ふは大層あかるくなつてゐる。ずん／＼進んで行くさ立派な造りの家があつて品のよいお婆さんが何やらしきりに、片付けてゐます。

太郎さんは、これが魔法使ひの婆さんではないか、さ氣づいたさき思はずぞつこしました。婆さんは、人の來た氣配に、ちろりこちらを見て、につこり笑ひ、

「おうお前さんは大層よい子だねさうしてこんな處へ來たの」

と大へんやさしく問ひました。太郎さんは

「はい道に迷つて」

と言ふより外に答へる事が有りませんでした。

「それはお困りだらう心配せんでもよい、私が道は教へてあげるから、まあこちらへ來てお遊びなさい。と言ふので、太郎さんが近寄つて見ると、其處のテーブルの上のガラス器の中には美しい金魚が泳いでゐます。これが次郎さんに相違ない、と思つて、早速三つの桃を出して、「これをお婆さんに上げませう」

と言ふとお婆さんはにこ／＼して受け取つて、それを食べたかと思ふと、遽にガラス器の中の水が荒れ出して、中から次郎さんが飛び出して來ました。

「おう次郎さん」

「太郎さんよう來てくれたね」

手を取り合つて逃げ出さうとすると、婆さんは

「おのれ」

と逐ひかけやうとしたが遽かに腰がぬけて、鬼人のやうな姿になつて、兩手ではひ廻つて逐ひかけて來る恐ろしさ。二人は一生懸命逃げ出して、出口の方へ走りまゐりました。二人が平らな岩の上に上つた時、急に其岩はくるりと廻

つて、「あはや」といふ間に二三丈もあらふと思はれる深い、深い、穴の中に落ち込んでしまひました。

婆さんはそこまで逐かけて來て、二人の落ち込んだのを見て、岩を廻し中を窺込んで、薄氣味の悪い笑ひ聲をあごにのこして、何を思つたか引き歸してしまつた。

二人はごうかして上れないか、と思つて、さぐつて見たが、ごうして／＼ごつからも上れさうも無い。

折角逃げ出すは逃げ出したものゝ、又此落し穴今に婆さんはやつて來て、ごんなひどい目に合はせるか、思へば身の毛もよだつ程である。二人は互に抱き合つて身を振はしました。

太郎さんはふと不思議な老人からもらつた鈴の事を思ひ出しました。

ポケットをさぐつて見ると其鈴があつたので、大喜び鈴を振つて見ると、不思議や前の老人が現れて、二人の手に取りました。

取られるまゝに二人は老人の手を握りしめた。暫らくすると『すうと』上に引き揚げられるやうな気がしたかと思ふと、穴の外に出られました。手を引かれたまゝ、暗い處を少し行くと岩がある。老人が右足をかけて押すと難なくあいた。すると老人の姿は、かき消すやうにきえてしまひました。

二人はホット一息、後ろの方に物音がするので、ふり返つて見ると、恐ろしいお婆さんは太い杖にすがつて、二人を逐かけてくるのでありました。

二人は又思ひ出したやうに、其處を逃げ出し四五町走つて、後ろを見ると婆さんは、やはり恐ろしい姿で逐かけて來ます。

二人は又一生懸命二三町行くと何百丈とも知れぬ谷。其傍を通り過ぎたと思ふ頃、後ろを見るとお婆さんはそこまで逐かけて來て、足を踏み外し其谷へ轉げ落ちて、恐ろしい魔法使ひの婆さんは、岩に當つて死んでしまひ。永く人の難儀が救はれたといひます。

二人は無事に歸つて此話をしました。
二人の二親や、近所の人の喜びは、ごんなであつたで
せう。

二、おこん狐

昔 ある山の中に、おこん狐といふ、氣立てのやさし
い狐が住んでゐました。
お連れのお初狐と、いつも仲よく、藝のくらべあひをし
て遊ぶのでありました。
狐の藝とは何でせう、姿を變へること、化けることであ
ります。
化ることも、おこん狐の方が上手で、お初狐はとふてい

叶はないのであります。

おこん狐は、化けることは上手でありましたが、決して
人の害などは、致しませんでした。

或る日、坂の中程の、赤松の下の日あたりのよい山道
へ二疋の狐が集まりました。

『ねいお初さん、今日も又面白いことをいたしませう』
『えいいたしませう、ではあなたから』

と先づおこんさんからやることに、なりました。
そこでおこんさんは、枯草をとつて頭にのせ、くるく
ると頭をなでると、田舎風の髪が結へました。其上へ蜘蛛
の巣をかぶせると、手拭ひのねえさんかむり。

松の花の粉をとつて顔にぬると、それがうす化粧、出
てゐる口を押へると、立派な娘の顔になりました。

こん度は身體を兩の手で「すう」となでると、今迄毛
一面のみにくかつた身体が見る間に田舎縞の着物となり
ました。

そして其上に長い尾をくるくるとまくと、それが帯にな
り、うしろで『ぼん』とたゞくときれいにお太鼓に結べ
ました。

それからそばにあつた、檜の木かしのきの葉を二枚とつて足の
裏へ、ぺたんくとはりつけると其頃流行の右わり雪駄
になりました。

間もなく山の下の方から、一人のお爺さんが、少しば
かりの荷物を背おひ、杖をついて、

『うんとこごつこい〜』
と上つて來ました。

おこんさんは道ばたに出て、

『おやそこへ見えたのは作兵衛爺さんではなくつて』

『お前は村のお花さんではないかこんな處に何してゐる
のだへ』

『お父さんを迎へに來たのだがまだゐらつしやらないの
でこゝにまつてゐるのよ』

『ふむそうか私は山向ふの親戚の所まで、此荷物を持つ

て行くのだが、年をとると、から駄目だ、腰が痛んで、
しよすがない。」

「それはいかないな、なんなら私が坂の上迄持ていつて
上げませう。」

と爺さんの荷物を持って坂の上まで行き、荷物を渡して歸
つて来ました。

「あらほんとにおこなさんはお上手な事ね、今度は私の
番、おや下から、大工の八さんが、上つて来る、八さん
にはお竹さんといふ娘があるからそれに化けて見ませう」
と急いで化けました。

八さんは道具箱をかついでどんく山へのぼつて来る

やり過して置いて、お初さんはお竹さんに化けて、其後
から逐ひかけ。

「お父さんくお前が出たあとで、お母さんは急に癢を
起し納らないで困つて居る、ごうか歸つて頂戴な、」

「それは大變だ、では歸らうか」

と云てお竹の顔を眺め、

「やいこの馬鹿狐めお竹なぞに化けやあがつてそんな手
に乗るか」

「あらいやだよ、お父さんは狐だなんかんと云てさ」

「化けぞこなひ奴てめいの面を見よ」

と云はれ手でなでて見ると、まだ耳がそのまゝでしたか

ら「はつ」

と思ふと、尾がぶらりと出ました。

八さんは「この奴狐め」

と足を上げてお初の横腹を蹴上げましたので

「くわん」

と一聲山の中に逃げ込み、化けそこなつたのを恥かしく

思ひました。

お初狐は、いつもく化けそこなひますから、なんと

かして、うまく化け、おこんさんに譽められやうと、い

つもその事ばかり考えてゐました。

或日お初狐は、おこんさんの處へ来て「明日は私が、

大名の行列をやつて見せますから、午の刻に、街道筋の

庚申塚の所まで、出て見てゐて下さい、

といひおいて歸つてしまひました。

おこん狐は、翌日午の刻、庚申塚まで出て待つて居ると

「下に居れ」

の制止の聲が聞え、それから露拂ひの武士二人、次がは

さみ箱、次がお徒歩の侍、次が騎馬の侍、次が御家老、

次が殿様のお駕籠、次が後備へと、五丁も續く行列が、

まことに立派で何一つ不足なく備つて居ります。

これを見たおこん狐は大層感心し

「ほんとに上手に化けたこと、何時の間にお初さんはこ

んなに上手に化けるやうになつたのだらう、一つほめてやりたいが、いつたいお初さんは何處にゐるだらう、きつとお殿様だわ、」

と一人言をいひながら、ちよこくとお籠に近づき、たれを上げて中を窺き込み

「お初さんほんとに上手に出来たわ」

と言葉をかけました。

此時お殿様は、お籠の中で居眠りをして、あらつしやつたが狐が窺いて何か云つたので、びくつくり仰天刀をぬいて、

「曲者」

と一聲切りつけました。

おこんさんは耳から頬へ切りつけられ、耳は落ち「かん」と一聲あはて、山の中へ飛び込みました。

これはお初さんが化けたのではなく、お初さんがほめられたさに、ほんとのお行列を自分が化けたやうに云たので、正直物のおこんさんは、こんな目にあつたのです

お初狐は、早速、おこんさんの穴に見舞に行きました。

おこんさんは、今かくの有様で、息も絶えくになつて苦しんでゐます。お初さんは、

「ほんとに私が悪るかつたわ、堪忍して頂戴よ」といふと、おこんさんは、少し頭を擡げ、「なんのそんな御心配

はご無用です、私は決して、貴女を、怨みません、何事も皆因縁と、諦めてゐますわ、そしてこのまゝ死んでも、人間のためになることをしやうと思つてゐますのよ、」
お初さんは、やさしいおこん狐の心に感心して歸りました。

それから三日程たつて、おこん狐は、とう／＼自分の穴で、死んでしまひました。

お殿さまは、ご臣をお連れになつて、山へ狩にお出かけになりました。

其途中何に驚ろいたか、お殿さまのお馬は、急に、高く

いなないて、駈け出しました。馬丁の與作は驚ろいて、馬をとめやう、としましたが、留め切れず、手綱にすがつて、二三町走りましたが、馬は益々荒れ狂ひ、

『ひーん』

と一聲高くいななき、竿立ちになつたのでお殿様は馬から、眞逆様に落ち耳の傍を打ち氣絶なさいました。

ご臣衆は、大騒ぎ、お狩も中止になつて、殿様を、お駕籠に乗せ、お屋敷に歸り、色々御手當を致しましたので、漸く息はふき反されたが身體は急になほりません。お醫者様も、「殿様の御身體は、むつかしい」と云ふやうになりました。

殿様はご家老を、近くお招きになつて、

「余がこんなになつたのは、馬丁與作の不束からだ、萬

一余が死んだら、與作を逆ばりつけにして余の仇を報ひ

よ」

といはれました。

與作は、このことを傳へき、生きた心地はありません。

與作の子に與太郎と云て今年十二になる、子供があらま

した。

此事を聞いて、ごうかして殿様の病氣をなほし父を助け

る工夫はないか、としきりに、考へてゐました。

そこから一里程へだつた、山の中に瀧の明神といつて、

大層あらたかな、神様がありました、與太郎は、その明

神の社に行き、瀧にうたれて、神前に出で

「ごうか殿様のお身體がなほつて、父の命が助かるやう」

と一心不亂に祈つて七日の間食物は口にしません。七日

目の明け方、夢の内に神様が現はれて、「殿様の病氣は、

先年庚申塚で、狐を切つたからだ、それだから、其狐を

社を立て、稻荷様に祠れば、殿様の病氣は自然となほる、

そうなれば、又お前の父の命も助かる」

と教えて下さいました。

與太郎は有がた涙にくれて、早速家に歸り其事を父母

に告げました。

それから一月あまりして、街道の庚申塚には一宇の稻荷堂が立てられました。殿様の病氣は、日一日となほつて、元の身體になりました。そして與太郎の事をお聞きになつて、俄にご近侍役を仰せつけられました。

馬丁の與作も、澤山のご褒美を戴きました。庚申塚の稻荷さんは、耳の悪い人が、不思議になほるといつて、參詣の客が絶えず。

「耳なし稻荷」といつて永く繁昌したといふことです。

三、三ちゃん

三ちゃんのお家は東京で、別にお金持ちではありません。

んが、又困るごいふ程でもありませんでした。

其后色々なところで失敗をし、お父さんが眼を患ふなごのことが、ありまして、お家はだんだん、貧乏になり、東京には居り憎くなり、少しの知り合ひをたよつて、信濃の國の片田舎に越して來たのは、三ちゃんの四つの年であります。

それから、三年たつて、三ちゃんは、村の小學校へ上つたが、成績のよいこと、誰一人並ぶもののないできて、

ありましたから、一年の終りには一等賞を貰つて、歸りました。二親の喜びは、ごんなであつたでせう。お父さんは目を患らつ

てゐらつしやつたが、悪るい目から、嬉し涙を流して、

よろこばれました。其年の秋のはじめ、お母さんは、ふと風をひかれ、床につかれまじした。

少したつたら、なほるだらう、と誰れも、別に心配もしませんでしたが、次第に病は重るばかりに、お父さんも心配しだされました、三ちゃんも、小供とも思へない程親切に、介抱いたしました。

二里ばかりへだつた町のお医者様も頼みました。しかし病は少しも、なほりません、日一日と重るばかりであります。

二ヶ月ばかりの後、お医者様も、

『これは、とうていなほりそうもない。』と申されました。

お父さん、三ちゃんのなげきは、ごんなであつたで、ありませう。

又お母さんの悲しみは、ごんなであつたであります。まづかに彩られてゐた、野や、山の木の葉も今は大方散り果て、ずつと北の高い山の頂は、はやまつ白くなつてゐます。

お寺の森の銀なんの木は葉一枚もなく、遠くから見るとうすい煙が上つてゐるやうで家の裏の落ち葉は西風に

ふきまくらられて、時々さむしい音を立てる、今はさぶしい冬枯れ時であります。

或日の夕ぐれお母さんは、床の中から、

『三ちゃん』

と力なく呼びました。

『はい』

と答へて、三ちゃん床のわきに座る。

お母さんは、やせ細つた青白い手で、頭の亂れ毛を、かき上げ。

目のくぼんだ、頬のこけた顔を少しく擡げ

『三ちゃん、私の身體は、もう駄目なの、とうていなほ

りそうもないのよ、だからね、遠いく冥土といふ處へ行かねばならないの、三ちゃんはね、さびしくなるが、お父さんはあんなに目が不自由なんだからね、よく云ふことをきいて、世話を、焼かしちやいけないのよ、それから一生懸命に勉強してね、立派な人になつて下さい、三ちゃんはお母さんがないから、あんな者になつたと、云はれるやうな人になつてはいけませんよ、よいかね』

あとはふとんに顔をあて、何とおつしやつたかよくきゝ取れません。

折しもお寺の入合ひの鐘

「ぼーん」「ぼーん」

三ちゃんとは唯泣くばかり。

それから急に、お母さんは重くなり、

翌日の明方、とうく息をひきとられました。二人のな

げきは、今更のやうで、よその見る目も憐れでありました。

泣くくさびしい野邊の送りをすまし、涙と共に其日

其日を送つてゐました。

お墓場の西南の隅、小さな新しい石塔の前には朝早く

毎日三ちゃんの手を合して、涙を流してゐる姿が墓場の

さびしさに、一層哀れさを添へるのでした。

悪いことには、又悪いことの、累なるもので、それか

ら、三月程たつて、お父さんは、とうく目がつぶれて、

しまひました。

三ちゃんの、なげきはごんなであつたでありませう。

すきな學校もさがり、毎日山へ行つて薪をとり、それを

賣つて、お米や、醤油や、其外色々なものを買ふのであ

りました。

夜は、更けるまで、草履を作り二三日ためて村中を賣

り歩き、お父さんを養つてゐました。

或雪ふりの寒い日、三ちゃんは、賣れ残りの草履を五

足ばかり肩にかつき、汚ない手拭で頬かむり、短い裕せ

一枚にやぶれたはんでん、足袋もはかず草履ばきで、家

路をさして急ぎ足に歸つて來ました。

水車屋の陰から現れました、五六人の子供中に一人の
 餓鬼大將は、此村の一番お金持ちの息子、名は義男とい
 つて、ごく意地悪るの腕白者、三ちゃんと同じ年だから
 學校も同じ級の今は三年生、學校では少しも出來ない、
 かり及第で、いつも成績のよい三ちゃんを、嫉んでゐま
 した。

今しも連れに何やら、さゝやき、三ちゃんの行く手に立
 ち塞がり、さんく罵しつた上句

義男は、先日學校で寫さして貰つた、作文はがきの手
 紙の文を懷中から取り出して、

「三公は優等生だから、これが讀めるだらう讀んで見ろ」
 とつき出され、三ちゃん手に取り讀まうとしたが讀めま
 せん。二年生も終らず學校を下つて毎日の働き、連達は
 今は三年生で、本字もよほご書けるやうになつてゐる。
 讀めないことを知つて、義男等は三公に見せて恥しめや
 うと、前からはかつた、子供の計略でありました。

三ちゃんもじくして居るのを見て義男は。

「やい三公、おぬしはこんな物が讀めないか、こんな物
 が讀めなきやあ、目が有つても盲目同様、此前先生がそ
 うおつしやつた、目があつて字の讀めない者は明き盲目、
 三公は明き盲目だ、親が奴盲目で、子が明き盲目、

よく似合てらあ』『やあい明き盲目よく』

一人が云へば皆が罵る、とうく皆して三ちゃんを雪の中につき轉がし、大聲舉げて逃げさりました。

三ちゃんは雪の中に倒れたまゝ、泣きしやくつて居ました。

折しも通りかゝつたのは、辰さんと云ふ、此村の馬方さん。

此有様を見て三ちゃんを助け起し、色々なだめて様子をきゝ、

『何義男達に、意地目られたと、かはいさうに、あいつ等の腕白は誰れも知つて居らあ、又お前の親孝行も誰一

人知らねい者はない、二人よればお前のうわさ、孝行は立派なものだ、孝行しなさいよ、孝行をしたい時には親は無し、死んでから何と思つたつて役に立たねい、おう孝行で思ひ出した私の後悔はなし聞いてくんねい、私の父さんは永い間患つてゐたんだ永いと云て七月ばかりだ始めは丁寧ていねいに介抱かいほうもしたが、しまひには、すまねい、こゝとだが粗略そりやくにするやうになつたのだ、或日のことに、父さんがな、床とこの中で、

『辰やすしが喰いてい』

といはしやつた、其時私は

『お父さん寝て居てあんまりぜいたくをいふ物じや無い

ぜ』

といふと、

『それもそうだなあ』

と團圓の中に頭をひつ込ました。

それから五日目に父さんは、とう／＼死んでしまつたのだ、あゝこんな事になるなら、食ひていといふものは食はして上るだつたにと、後の後悔先には立たずだなあ三ちゃん、おらあ父さんの位牌を見る度に、すしのことが思ひ出されてならぬい』

『あゝ永いことをしやべつて、氣の毒だつた、其草履は、私を買つてやらう。』

皆買つて貰つて家に歸つて参りました。

『お父さん只今』

『おう三吉戻つたかごんなにか寒かつたらう今日お隣の叔母さんから、おはぎを戴いた、私も一つ食べて戸棚の中に入れて有る、それを食べて、火にでも當つてくれい、三やお前は何かすゝり泣きをしてゐるやうじやが、お腹でも痛いか、又轉びでもしたのか……うむ何、義男に……何親が奴盲目で子が明盲目と云たか、おれは盲目だから盲目でいゝ、がしかしお前は一生明盲目には、しともない、と云て今ごろすることも出来ずえい、この目がせめて片方見えたら、……うむ、よしお前の一生にはか

へられない、私は今日から筋向ふの米屋へ米搗に雇はれても、お前を學校へ出してやる、明日から勉強してくれ。」三ちゃん止めるも聞かず、米屋に行き、事情を明して米搗きに雇はれ、三ちゃんは、學校へ行くことになりました。

お父さんが、米搗きをして學校へ出して下さるのですから、三ちゃん尙一層勉強しました。

唯さへ出来のよい三ちゃんが此勉強、誰も叶ふ者は有りません。

尋常科卒業の折には、第一番の優等賞、お父さんも、これまでにして、克く子供を學校へ出した、といふので、

郡役所から、立派な賞與を戴くことになり、卒業式によび出されて式につらなりました。

式が終つて、お父さんは、三ちゃんと自分の賞與を手で探り「みんなお前の勉強からだ、すこしでも目が見えたら此立派な賞與が見られるものを、お母さんが生きてゐたら、ごんなに喜ぶことだらう。」

と嬉し涙を流されました。

それから三ちゃんは、東京に出て、新聞賣りや、牛乳配達をして、勉強して居ましたが或る醫學博士に助けられ、其處の家から、學校に通はして貰ふやうになりました。

博士は、三ちゃんのお父さんのことを聞かれ、

「其目を私が見てやらう」

と東京に呼び寄せ丁寧ていねいに診察しんさつせられ、

「まだ此目はつぶれ切つては居らぬ、療治りやうちをすればなほ

るかも知れない」

とおつしやつて、一生懸命いっしょうけんめいに療治りやうちして下くださいました。

不思議ふしぎにも、だんくよくなり三月程みづきほどして、立派りっぱな目

明あきになりました。

此時の親子このときのおやこの喜びは、とうていたとへやうは有りません。

三ちゃんさんちゃんは、それから、だんく出世しゅっせして、お父さん

と、二人ふたりで仕合あはせな月日つきひを、送りおくりました。

四、鬼童丸まどうまる

昔むかし丹波たんばの大江山おほえやまにゐた、酒呑童子しゆてんどうじの仲間なかまに、鬼童丸まどうまる

といふ魔法まほう使つかひの悪者わるものが、ゐました。其頃そのころ京都きやうとには源みなもとの

頼光よりみつといふえらい大將たいしやうがゐて、守まもつてゐましたから、悪わる

い事が出来できません。

ごうかして頼光よりみつを殺ころさうくとねらつてゐましたが、強つよ

い大將たいしやうだから殺ころすすきがありません。

或時あるとき頼光よりみつ公こうが病氣びやうきにかゝられました。

殺ころすのは今いまだ、と鬼童丸まどうまるは山やまから出いで、すきを窺うかがつて

ゐました。

頼光よりみつ公こうのお屋敷やぶきでは、毎夜まいよ怪あやしい事ことがあるので、臣おみの

人々は少しも油断は致しません。

ことに臣の中には四天王といつて、ごく強い人が四人ありました。

それは渡邊の綱、浦部の六郎、坂田の公時、白井の貞光の四人でありました。

此人々は頼光公のやすんでゐらつしやる、次の座敷で寝ずの番をしてゐるのであります。

鬼童丸は、毎夜、覆面頭巾で顔をかきし、お屋敷の周囲を廻り、忍び込むべき隙を考えてゐるのであります。

四天王は毎夜の寝ずの番でつかれきり、とてもこれでは、勤まりさうも無い、といふので四人籤抽きをして、

一人づゝ寝ずの番をすることに決定しました。

第一番に籤に當つたのは渡邊の綱でありました。今夜

こそ何か來たら、ひつ捕えてやらう、と勢ひ込んで、次

の座敷に扣へてゐました。宵のうちには、何事もなく、

夜も更け渡つて丑滿の頃となりました。しきりと眠氣を

催すので、一生懸命、眠たさを、こらへてゐると廊下の

外の雨戸を『とんく』叩く者がある

綱は左手に大劔を提げ立ち上り、

『何者だ』と聲を掛けると、

『はい私で』といふ聲は毎日お脈を伺ふ醫者の聲、何故

夜更けて參つたか』

と言ふに、

「はいよんごころない用事の爲今日御脈を伺ひに参上致しませんが、夜更けながら参上致しました」

と答ふるに、「左様か」

と何心なく雨戸を引きあげ、ふと見れば、驚くではありませんが、お醫者ではなく、七尺有餘の大入道、大口あいてからくくと笑つてゐます。

「己れ妖怪」と刀抜く手も見せず、眞二つ、

大入道は「きやつ」とさけんで倒れました。此物音に臣の面々燈火とつて、立ち出で、この話をきき、よくよく見るに、いつものお醫者が血にまみれて倒れてゐます。

綱は心の迷から人を殺した、とあつて座敷牢に入れられました。

次の夜は浦部の六郎、同じく次の座敷に扣えてゐると夜中になつて、しきりに催す眠氣をこらえてゐると座敷の外に人の足音、

「何者か」と聲をかけると、

「はい私で、お茶を一服差し上げます」

と、いふのはいつもの茶坊主の聲、

「それは大儀」と立上つて唐紙を明けければ茶坊主ではなく一尺ばかりの一目小僧大口あいて、笑つてゐます。

「妖怪そこ動くな」

と刀を抜いて眞二つ、臣の人々集つてよく見ればい
つもの茶坊主が殺されてゐます。

六郎も座敷牢に入れられました。

第三番目は坂田の公時の寝ずの番であります。公時は、

始め金太郎といつて足柄山で熊や、猿を對手に、育つた

勇士です。

前の二人は刀があつたばかりに、人を殺し罪を受けた

のだ。己れは刀なしで、もし怪しいものが出たら、つか

み殺してやるぞ。と刀を持たず、次の座敷に構へ込んで

ゐました。宵の内はやはり何事もなく、丑満つの頃にな

つて、こらへ切れない程の眠氣をこらへて、あると、天

井裏で、みしりくくはてなと天井を見つめてゐると、

「ごたん」とはげしい音と共に何か座敷のまん中に落ち

ました。

「何んだらう」

と眸をすえてよく見れば、およそ一間四面もあらうと、

思はれる平家蟹がブクく泡をふき鉞を張つて座敷のま

ん中にゐます。

公時は

「おやく／＼えらい物が出て来たぞ張り殺して呉れやうか」
と拳骨を固め近づいたが、いや／＼これは生け捕つてや
らう。と力を入れて押へ付けたが中々押へ切れない。

とうく蟹の甲の上へ馬のりにまたがりました。

蟹は平気で、座敷中をはひ廻る。

公時は馬に乗った氣で「はいごうく」

蟹は、暫らくして廊下にて、鉢をあげて雨戸をあげ、

外に出たので、公時は、

「ごこへでも行け」

と、平気で上に乗つてゐると、庭の泉水の中に入らうと

するので、これはいかん水の中へ入られては己は叶はん。

と思ひ金剛力を出して、「うん」と上から押へつけました。

すると、蟹の甲は破れ中から水が出て、公時の尻はぬれ、

何とも言へないいやな、心持がしました。

公時は其時大聲をあげて

「公時が怪しい物をつぶした皆ないで合へく」

多くの人々は不思議に思ひ、集まつて見ると、なつめ

形のお庭の手水鉢の上に馬乗りに乗り、餘り力を入れた

ので、一方が土の中に喰ひ込み水があふれてゐる。

皆々これを見て大笑ひ。

三人共悪者の魔法にかゝつたことが知れたので、皆々

罪を容るされ、今夜は四人そろつて、寝ずの番をするこ

とになりました。

鬼童丸は今夜こそ、忍び込まうと、用意をしてお屋敷

の外に待つてゐます。

四天王は、あまりたいくつなので、二人づゝかはるゝ、碁を、圍んでゐましたが、夜中になつて、ひごく眠たくなり、四人共、碁盤の上に頭をそろへ、すつかり寝込んで、しまひました。

鬼童丸は、何處から忍び込んだか此座敷まで来て、此様子を見、につこり笑つて、座敷を通りぬけ、頼光公のお座敷まで入り込み刀を抜き放ち、今や眞二つ、と思ふ時、床の間にあつた、源氏の家につたはる銘劍が、不思議にも二寸程、鞘から抜け出し、又元に納る時、チンと鐸音がしました。

此物音に頼光公は目を醒し、夜具の下にあつた刀を執

るより早く立上り、鬼童丸目がけて切り付けました。

鬼童丸は『しまつた』

と互に渡り合ひました。此物音に四天王の人々は目を醒

し、四人一度に切りつけたので、鬼童丸は『こりや叶わ

ぬ』と一生懸命、逃げ出しました。

四天王は逃してなるものか、と矢弓を執つてあと逐かけ遂に鬼童丸を討ち取つてしまひました。

五、名劍稻荷丸

昔、赤穂の淺野公のお臣に、岡島八十右衛門といふ人

があらりました。此人は至つて正直で、無慾な人でしたから、何時も貧乏

でありました。

或時、殿様のお祝ひ日に、お屋敷に召され色々御馳走を下さいました。

大勢のご臣は皆今日を晴れと、衣飾つて、お殿様のお屋敷に、集りました。

ご用もすんで、皆々御馳走を戴く席に集つた其時、ずつと上役の大野九郎兵衛といふ人、これは慾深で、意地悪で、よくない人で、ありました。しかし刀を見る事が上手で、一目見たら、ごんな刀かすぐ解るのでした。

此時も一人く皆々の刀を見て色々批評してゐました

が、岡島の刀が大層悪いので。

「此刀は何か、刀は武士の魂ではないか、ごんな刀でいざ戦争といふ時、何の役に立つ、ごんな刀を持つてゐるものが、世に言ふ祿盗人犬侍だ」

と大勢の人の中で恥をかゝせました。

岡島はくやしくて、家に歸つても泣いてゐました。

岡島の臣に直助といふ、若者があつて此有様を見て、心の内に思ふには、御主人は貧乏で刀が悪いばかりにあんな、恥をおかきに、なつた。自分はごうかして刀鍛冶屋になり、大野の刀よりまさる刀を拵らへて主人にあげ、そうして、あの恥雪ぎをしてあげたい。

直助はわざと、心の内をうち明けず、主人に暇を貰ひ、赤穂を立て、大阪に來ました。そしてあそこ、こゝ尋ねてよい刀鍛冶の御弟子にならうと考へてゐるのであります。

大阪堀留といふ所に、津田越前守祐廣と云ふ、名高い刀鍛冶屋があります。

直助は此店先へ來て。

「御免下さいませ」

「何處からお出でだ」

「親方にお目にかゝつて、少々お願いしたいことがあつて参りました。」

「私が津田だが何のご用だ」

「左様で御座いますか、私は赤穂の生れで、直助といふ者ですが私は刀鍛冶になりたいと思ひますが、あなたのお弟子にして下さることは出来ませんか」

「さうですか、しかし今のところ、弟子は大勢ゐるからすぐといふ譯には行かん、まあ外々をきいて見なさい。」とすげなく断られました。

直助は力なく、其處を出て、町裏に來て、一つの井戸を見付け、其中に飛び込んで、死なうとしました。

其時不意に、後ろから留た者がありましたので、誰かと思つて見ると、前の津田越前の守でありました。

越前守は、わざとすげなく断つて直助の心をためしたの
 でありました。

家を出るさきあまり落膽したらしく、涙さへ流してあ
 ましたから、もしやと思ひ跡をつけて来たのでありまし
 た。そして、

「死ぬ程刀鍛冶になりたいなら、私の弟子にして上げや
 う」

と家に連れ帰り、御弟子の内に加へてくれました。

直助は大喜びで、それから骨身をおしまず一生懸命に
 働きました。

五年程立つて弟子中に並び者のない程立派な刀鍛冶に

なつたので、主人も其上達に大層驚きました。

しかし、直助は一度も、自分の志を人に明した事はあ
 りませんでした。

七年目の冬、直助は毎夜井戸の水をかぶり身を浄め、
 京都は伏見の稻荷様を念じ、

「ごうか神さまの力で立派な刀をうたして下さい」
 とお願いひして、仕事場に行き、人の寝てゐる間に刀を

拵らへるのであります。

或雪の降る寒い夜、源次郎といふ、一人のお弟子が、
 便所へ行かうと起き上り、ふと、耳を澄すと、仕事場で

「テーン」「カーン」

槌を打つ音、

「はて此夜中に誰か仕事をしてゐるのだらう」

と仕事場近く行き、こちらから、よく見ると

直助が一心不乱に刀を拵らへてゐます。

刀をこしらへるにはごうしても、根槌と、向ふ槌との二

人がいる。根槌を打つ人は短い柄の槌で、「テーン」

向ふ槌を打つ人は、長い柄の槌で、

「カーン」

二人が、呼吸を揃へて

「テーン」「カーン」「テーン」「カーン」

と打つのであります。

根槌は慥かに、直助であるが、向ふ槌は、誰れだらう。

眸をすえて、よく見れば驚くではありませんか。

向ふ槌を打つてゐるのは、一疋の狐、

源次郎は驚いて、主人に此ことを話す。

主人はこれを見て、

「何か深い譯があるだらう、誰にも云ふな」

と知らぬ顔ですました。

七日ばかりたつて、出来上つた刀に稻荷丸といふ名を

附け、主人の前に持ち出し、始めて自分の心を明し、「此

刀が切れるか、切れないかためして下さい。」と申しました。

主人は始めて直助の心を知り深く感心して其刀をため

して見ると、不思議ではありませんか鐵でも、やすく切れるのであります。

そこで、其刀を立派に拵らへ上げ、

これを持って、赤穂の元の主人の家に歸り、今迄のことを残らず物語りました。

主人は涙を流して喜び、其刀を二度も三度も、押し戴きました。

暫らくすると、又殿様の御祝ひ日が参りました。

岡島は此刀をさし、殿様のお屋敷へと出掛けました。

又御馳走の席に集まつた時、大野九郎兵衛は、人々の刀をしらべ、自分の刀を出して大層自慢をしてゐました。

が、岡島の刀を見て

「これは大分よい自分の息子にこれ位の刀が持たしたい、何程ぐらゐで出来るだらう」

と問ひましたから、

「此刀を拵らへた者が丁度私の家にとまつてゐますからおきゝ下さい」

といふと。

「それは丁度よい呼んでもらひたい」

といふので、使をやつて、呼びよせました。

大野は直助を見て、

「お前が此刀を拵らへたとのこと、これは如何程致す」

「大安賣りで千兩に致しておきます。」

「馬鹿なことを云へ私の刀は古今の名刀だ、それですら五百兩だ、後學のために見ておけ」

とそれへ大野は、自分の刀を出したので、直助は手に取り上げて鞘を拂ひ、中身をしらべると、中々立派なもの、心の中に感心したが顔へは出さず、

「へんこんな刀が古今の名刀か、いざ戦争といふ時には、ボツキと折れる。こんな刀をさして威張つてゐる者は、世にいふ祿盗人、犬侍だ」

これを聞いた大野は頭から、煙を出して、かん／＼に怒り出しました。

「そんなにお怒りになるなら、私の刀であなたの刀を切つて見ませうか」

といふのをきいて、

「よし切れるなら切つて見よ」と一層怒ります。

次の座敷で此ことをお聞きになつた殿様は此時、そこへおでましになつて、

「それは面白いことだやつて見よ」

と仰せになつたので、いよ／＼直助の刀で、大野の刀を切ることにまりました。

碁盤を一面借り受けて、白紙を其上に敷き大野の刀を

刃を上に向けて、其上に置き直助は自分の打つた稻荷丸を主人岡島より受け取り、碁盤の前に進みました。

殿様始め、ご臣の面々ごうなることかと、手に汗握つて見てゐられます。

直助は目を閉ちて、伏見の稻荷様を心に念じ目を開いて刀の鞘を拂ひ、中段に構へて氣合をはかつてゐましたが

「ヤツ」と一聲切り付けると、不思議や、大野の刀は錨元から三寸程はなれたところから、「ボツキ」と切れました。殿様はじめ多くのご臣は手をたたいて、お譽めになりました。した。

大野は大恥をかいて、こそくと自分の家に歸りました。

それから刀の自慢は一度もせなんだ、といふことであります。

直助は後に、丸津田越前守助廣といふ、立派な刀鍛冶になりました。

◆青年會の部

一、堪忍袋

人の一生には、失敗もあり、腹だゝしいこともあります。そうした場合に、悲觀したり、

怒りにまかせて、前後の考えもなく、ことをしたりして、其身の一生を誤る者は、澤山あります。

昔から『なる堪忍は誰れもする、ならぬ堪忍、するが

まことの堪忍』

といふ諺のとほり、堪忍といふことは、出来憎いことのやうです。しかし修養によつて、堪忍の出来るやうにすることは、處世上大切なことであります。

豊臣秀頼公の臣に、木村長門守重成といふ人が、ありました。

此人は智勇兼備の名將で、又文武兩道の達人、何不足のない、立派な武士でありました。

かういふ人を、御手本にして、自分をみがいて行けば、人は必ずえらい人になれます。

しかし、人はそうばかり行きません、

中には、人のすぐれた所を嫉み、其人の失敗を願ふやうな小人も澤山あります。

同じ秀頼公の臣に大野道見といふ、心のねちけた武士が、ありました。

重成の人にすぐれてゐるのが、いましくしくてならず、常に「やりそこなひはないか」

と、見てゐますが萬事にぬけ目のない、重成のことです。から、すること、なすこと、人の信用を増すばかりであります。

道見はこれを見て、何かしきりに考えてゐました。秀頼公や、其の臣は、皆大阪のお城にすまつてゐられる

のですが、此大阪城内には、茶坊主といつて、お茶のお給仕をしたり、人々の用を足したりするご臣がたくさんゐりました。

此茶坊主の中に、少し愚かで、亂暴な、智徳院三阿彌

ごいふのがゐりました。

道見は或日のこと、此三阿彌を招き。

「三阿彌お前等の知ての通り此大阪城はいつ何時天下を相手に戦争をせねばならないやうになるかわからない、そういう場合に木村のやうな、なまくら武士が威張つてゐては、味方の利益だ、今の中に取り除いてしまひたいが、私のたのみを一つ聞いてはくれないか」

と言葉巧みに説きつけました。

愚か者の三阿彌は

「へい私で出来ますことなら、ごんなことでも致します」といふので、道見は喜び、

「それは有難い、それでは、一つ木村と喧嘩をして呉れ、喧嘩をしてもしお前が、木村の頭を一つ叩いたら、褒美は一兩やらう、二つ叩いたら二兩やらう」

「へい人の頭を叩いて褒美がもらへるとは有難い一つやつて見ませう」

と、一も二もなくひき受けました。

智徳院三阿彌は、それから、重成と喧嘩をする折を、

考^{かんが}えてゐました。

或^{ある}日^ひ重^{しげ}成^{なり}はそんなことゝは露^{つゆ}知^しらず、城^{じやう}中^{ちゆう}へやつて参^{まゐ}られました。

三^{さん}阿^あ彌^みは

「重^{しげ}成^{なり}がやつて來^きたぞ、今日^{けふ}は一つ喧^{けん}嘩^わを始^{はじ}め褒^{ほう}美^びの金^{かね}が貰^{もら}ひたいものだ」
と思^{おも}つて、喜^{よろ}こんでゐます。

重^{しげ}成^{なり}は長^{なが}い廊^{らう}下^かを、こちらへ進^{すす}んで來^くる。

三^{さん}阿^あ彌^みは茶^{ちや}坊^{ぱう}主^す部^へ屋^やに入^いり中^{なか}から不^ふ意^いに刀^{かたな}を鞘^{さや}のまゝ、重^{しげ}成^{なり}の通^{とほ}りてゐる前^{まへ}に、つき出^だしました。重^{しげ}成^{なり}はすばやくよけて、通^{とほ}りすぎやうとすると、

三^{さん}阿^あ彌^みは後^{うしろ}から、

「一^{いち}寸^{すん}待^{まち}つて下^{くだ}さい」

「待^{まち}てといふのは私^{わたし}のことか、何^{なん}の用^{よう}か」
と静^{しづ}かに云^いふと、

「貴^{あなた}方^{なた}は、私^{わたし}に何^{なん}の意^い恨^{こん}があつて、武^ぶ士^しの魂^{たましい}たる刀^{かたな}を足^{あし}げになさつた。」

重^{しげ}成^{なり}は驚^{おど}ろいて、

「何^{なに}をいふ、重^{しげ}成^{なり}も武^ぶ士^しである、人^{ひと}の刀^{かたな}を足^{あし}げにするやうな愚^{おろ}者^{もの}ではないぞ」

「でも私^{わたし}がちやんこ此^こ處^こで見^みてゐました。しかし足^{あし}げにしないといふ證^{しやう}據^こがあつたら、見^みせて下^{くだ}さい」

重成は賢い人ですから、「はあれは喧嘩をしかけるのだな、對手になつては、つまらない」ご思つたので。

「左様かそれでは私が悪かつた、詫るからかんにんして、もらひたい」

「只はお許しするここが出来ません」

「それなら如何いたす」

「貴方の頭をぶちます」

「如何ようとも致せ」

と、重成は坐つて頭を下る。

三阿彌は、力任せに、重成の頭を、

「ポカン」

と叩く、重成は無念をこらへて、

「それでよいか」

「まだいけません」

「左様か如何ようにも致せ」

と頭を出す「ポカン」

「それでよいか」

もうよろしい、「以後はお謹みなさい」

「以後は氣をつけるであらうぞ」

重成は静かに立上り、殿様の御用を伺ふ爲奥に行つて

しまひました。

三阿彌は後見送つて「につこり」

ついで立ての陰で此有様を見てゐた、道見は此時こゝに現れ出で、

「智徳院うまくいつたな、お手柄く」と上機嫌、紙入の中から、二兩の金子を出して、三阿彌に與へ、其上二兩與へて、此ことを人々に、觸れ廻るやうにいひつけました。三阿彌は、此ことを城中隈なく話し廻つたので、大阪城一般の評判となりました。血氣にはやる武士たちは、皆重成の弱いのを罵りました。重成の無二の友人に、薄田隼人といふ至つて強い武士がありました、此評判をきき、腹を立て、重成の家に来て事の眞偽を正し、實際あつたことと、きき、友人の交を絶

つ、と云て怒り出しましたから、

「あんな茶坊主位のする事は人のすることゝは思はない、蠅がとまつた程にも感じないから腹も立たない」

と、いつたので、薄田も、重成の心の大きい堪忍強いのに感心して、自分の家に歸りました。

薄田隼人は、其翌日登城して、三阿彌を招き、「お前は先日お廊下で、木村重成と喧嘩をし重成の頭を叩き、其上あやまらせたさうぢや實に感心強い者ぢや」

「いや怪我が功名でござる」
「決してそうではない。實にお前の勇氣は感心だ、しかし智徳院三阿彌では、名がよわそうだ、何かよい名を付

けてやらう』

『うむさうだ、昔印度の國、お釋迦様の御弟子にハイ長老といふ勇僧がゐた此お坊さんは實に勇氣があつて、牛でも張り殺す程であつた、お前も、此坊さんに劣らないから、ハイ坊主といふ名をやらう、』
とからかひ半分に云たのを、眞にうけて、

『ありがたうございます、』

此こそが、いつの間にか城中に廣がつたので、皆々三阿彌を呼ぶに、『蠅坊主』『蠅坊主』
三阿彌はいつも『ハイイ』『ハイイ』

と元氣よく返事するのでありました。

三阿彌は、或友人から、この名は實はほめて附けられたのではなく、重成が自分を蠅同様と、いつたのを、薄田がからかひ半分に、蠅坊主と、附けたのだと聞き、

『うむ残念な』

と齒がみをして怒り、其後は蠅坊主と呼ばれても返事もせず、此無念ばらしをする折を考へてゐました。

或時重成は登城して、夕方風呂に入らうと風呂場へと行きましました。

三阿彌は、風呂場で、以前の無念晴しをしやうと、後から風呂場に行きましました。

ちやうど其時、重成は、向ふむきになつて、風呂の中で洗つてゐましたから、三阿彌は、後ろから、力任せに、重成に打ちかゝりました。此時重成は「ハツ」と体をすかしたので、お隣りで洗つてゐた、薄田隼人の肩先を、「ウン」といふ程打ちました。

薄田は火のやうに怒つて、三阿彌を、投げつけ、尙も打ち殺さうとしましたのを、重成が色々あやまつて、助けられました。

三阿彌は、心から「悪かつた」と改心し、重成にあやまり、名を山添良閑と改め、遂に重成の臣となり、心から忠義をつくし、立派な武士にな

りました。

これは重成の堪忍の徳に化せられ、つまらん人間が立派な武士になつたのであります。

二、酒の害

昔から「酒と煙草は養生に害あり」

と云はれてゐます。酒は飲まないのに越したことはないでせう。しかし酒に飲まれずに、酒をのみ、實際攝酒の出来る人には、あまり害はないだらうと思はれます。

赤穂の義士の中に小山田庄左衛門といふ人がありました。

此人至つて酒が好物、飲めばいくらでも、あとを引くと

云ふ人でありましたから、お殿様の敵討ちをするまでは「酒は飲むまい」と誓つてゐました。

いよく、元祿十五年十二月十四日となり、今夜、同志の人々と本所松坂町の吉良の屋敷に討ち入りして、殿様の讎を報ずる、といふことに決定されました。

庄左右衛門は、三日前から降り積る雪を踏みしめながら、深川八幡宮に参詣して今夜の武運を祈りました。

帰り道通りかゝつたのが丁子の風呂といつて、風呂屋と飲食店とを兼ねた家。

庄左右衛門は、一杯風呂に入つて、寒さを忘れやう、と中に入り一風呂あびて、好い心持になつて一休みして

ゐると、何處からともなく酒の香ひ、「ぶーん」

酒ずきの庄左右衛門、これをかいてはたまらない。

一杯位はよからうと、下女を呼び一杯飲み初めたが、

失敗の基、一杯が二杯、二杯が三杯、遂に一升ばかり飲

み干して其場にごろり横になつたが最後の助、白川夜舟

と寝込んでしまひました。

下女は、風を召しては悪い、と夜具を掛けて其場をさがる。

暫くたつて「ドーン」「ド、ドーン」

耳をつんざく、山鹿流儀の陣太鼓、

庄左右衛門は夜具を蹴立て、起き上り、裾端折つて一

目散、駈けて来たのは松坂町、吉良の屋敷であります。

今しも同志の人々は此處彼處で一生懸命、こゝを先途と
戦ひの眞最中でありませす。

庄左右衛門は「後れてならじ」

と中に飛び入り、奥ての方に進んで行く、つい立ての陰
より現れましたのは、年の頃六十有餘薙刀とつて、立上り
「我こそは吉良上野なり、何物なれば夜中無斷で推参す
るぞ、其所動くな」

と切りつけて参りました。

虚左右エ門は、勇氣百倍、刀に手を掛けやうとしたが、
これはしたり、あまり急いで刀を忘れ獲物がなない。

「えいこのおいぼれ何程のことやあらん」

と拳骨固めて打ち向ひました。

今しも切り込む薙刀の下をかひくゞり、敵に近付き拳
を固め敵の横すらへ

「ぼかん」打ち込むと、こはしも不思議、敵のかしらは
「ポツキ」

と折れて、血潮は「しゆつ」

と上に上り庄左右衛門の顔にかゝりました。あまりの不
気味に「あつ」

と叫ぶと目が醒めました。

とたんに鳥が「かあくく」

庄左右衛門は丁子風呂屋の座敷に寝込んで敵討ちの夢

を見てゐたのでありました。
あはてゝとびおき雨戸を明けて外を見れば夜はすつかり明けはなれてゐます。

「しまつた」

酒に心を奪はれて、大事の仇討の機を失つたか

「もうこれまで」

とすでに腹切らうと、しましたか、「今死んでも間に合はない」

と其所を立ち出でました。

後に此人は、お醫者をして世渡りをしてゐましたが、遂に盜賊に殺されて、永く汚名を、後の世に遺しました。

小山田庄左右衛門などは酒に飲まれて身を亡ぼした人と云てよいのでありませう。

三、頓智裁判

人には、時に頓智、頓才といふものが必要であります。徳川八代の將軍吉宗公の時、江戸町奉行を勤めて居られたのは、有名な大岡越前守殿でありました。此人は名判官として、多くの人に知られてゐます。

或時吉宗公の御前に出ました。

吉宗公はいつになく、御機嫌よく、

「おう越前か、よく参つた、そちは名奉行とのうわさが高い、今日は一つ余を取り調べて、罪に落して見よ」

と仰せになりました。

こんな難題は、めつたにない。越前の守は

「畏こまつて候、しかし、調べる者が下に居り、調べら

れる方が上に居られては、調べにくうござりますれば、

何卒場所を、お變りを願ひ上げまする。」

と申し上げますと

「うむさもあらん」

と吉宗公は、下にお下りになりました。

越前守は、將軍の席に直り、白扇を膝につき立て、威

儀を正し、

「こりや、願ひ人頭を上げい」

將軍は此聲に、頭を上げ、越前の顔をご覽になると、

其嚴かさ、氣高さ、何とも云へない程ですから、將軍も

思はず

「ははあ」

「其方姓名は何と申す。」

吉宗公はしばらく考え。

「三河屋徳右衛門、と申す。」

「何職業を営み居る」

「……宿屋渡世を営み居るわ」

「しかと左様か」

「武士に二言……いや町人にも、いつわりはないぞ」

此時越前守凜然として、
 『宿屋業三河屋徳右衛門ならば、即ち町人、町人の分際
 として、上將軍も恐れず、三葉葵の紋つけたる衣服を着
 し居るごは、いはふやうなき不届者、今日より入牢申し
 付くるぞ』

とはつたとばかり、にらみ付けました。

吉宗公は、此勢にちぐみ上り。

『あゝもうよし／＼其方の調べは天晴／＼』

と大層お譽めになりました。

神田三河町に、辰さんといふ正直な、大工さんがあり
 ました。

家は大層貧乏でありましたが、一人のお母さんに大層
 孝行でありました。

お母さんはふさひいた、風が原因で、永く病の床に臥す
 ことになりました。

だん／＼身體が弱つて、用をたすことも出来ないやう
 になつたので、辰さんは心配して、一生懸命介抱をしま
 したが、中々よくなりません。

お医者様が「大層お身體がお弱りですから、鴨でも食べ
 させねば薬の廻りが悪い」とい
 いはれましたが、貧乏の悲しさ鴨一匹買ふ錢もないの
 で、其まゝにして居ました。

辰さんが、或日お城のお堀端を通りかゝると、澤山な
鳴がお堀の中に泳いでゐました。

「あゝあんな鳴が一匹あつたら、お母さんに上げやうも
のを、」

と一人言をいひ何心なく、小石をとつて投げつけると、
不思議や、一羽の鳴に當り、ころりと横になつたかと思

ふと、岸べに流れ寄りました。
辰さんは天の與へと、喜んで、其鳴を拾ひ上げハツピの

陰に隠して歸らうとすると、忽ち二三人の武士に見とが
められ、繩をかけられてしまひました。

此處は「殺生禁斷の場」と云つて、小魚一疋捕えても重

い刑に處せられるのでありました。可愛想に辰さんは、
それから牢屋住居の身となりました。

そして、時の町奉行、大岡越前守様のお調べを受けるこ
ごになりました。

いよくお調べの日ごなるご、辰さんは牢屋から引き
出され、組合一統の者たちも呼び出されました。

一通りお調がすむと、組合一統の者から、辰さんの日頃
親孝行であることを、申し上げ皆々罪を宥されるやうに

お願するのでありました。
越前守様は、だまつて皆々の言葉を聞かれ、役人にいひ

つけて、辰さんの殺した鳴をとり出させ、よくよく眺め

て居られましたが、
 「こりや組合一同の者、此鳴はよくく見れば死んだの
 ではなく、一時氣絶したらしい、鳴醫者に見せたら、生
 き歸るかも知れないさうなれば辰の罪は宥される、早く
 鳴醫者に見てもらへ。」とそれへ「ぼーん」
 と其鳴を投げ出されました。
 組合の人々は其鳴を持って外へ出たが何が、何だかさつは
 りわからぬ、鳴を見れば慥かに死んでゐる。
 鳴醫者くくと探して見たが、そんなお醫者は一人もゐない。
 其内に年とつた一人、ぼん、と膝を叩きこれは鳴屋で生
 きた鳴を買つて來い、との謎だらう、といふと、皆さう

それにちがひなくと心づいたので、早速死んだ鳴は
 うち捨て、鳴屋に行つて、生きた鳴を買ひ、大急ぎで、
 お奉行様の前に出で、
 「鳴醫者に見せたらお奉行様のお言葉通り、生きかへり
 ました。」
 とそれへ出しましたら、
 越前守様はにこくして、それは結構殺さん者に罪はな
 い、「辰とやら無罪であるぞ、早やく立ちませい、」辰
 さん罪は宥されました。これは孝行の徳さ、大岡様頓
 智裁判のお蔭であります。

◆ 處女會及び工女の部

一、蟹姫八重子

八重子さんのお家は、大層お金持ちでありました。お父さんや、お母さんは、一人娘の八重子さんを手の中なかの玉たまのやうにかはいがつてゐました。八重さんは、至いたつて賢かしこい、やさしい生なまれつきで、其上かみ親孝行おやうやうで、お父さんや、お母さんの言いひつけを、そむいたことは一度いちどもありませんでした。或ある日ひ、お使つかひの戻もどりにお宮みやの前まへを通とほりかゝるご、七八ひち人にんの子供こどもが集あつつて、何かわい／＼云いつてゐるので、何なにであらうと近ちかづいて見みれば澤山たくさんの蟹かにを捕とらえて、弄もてあそんでゐるの

でありました。

八重子さんは、可愛かわいさうに思おもつて、お錢かねを出だして其蟹そのかにと取りかへ、家いへに戻もどり裏うらの小川こがはの石垣いしがきへにがしてやりました。

蟹かにはたいそう喜よろこんで、嬉うれしさうに、長ながい目を動うごかして、皆みな石垣いしがきの中なかに入り込こみます。

其様そのよう子すを見みてゐた、八重子やへこさんは、

「あゝよいことをした」

と一人言ひとりごとを云いつて、喜よろこびました。

それから、蟹かにが何なんとなく親おやしくなり。

いつでも、子供こどもの捕とらえてゐる、蟹かにを見みると、お菓子おかしや、

おもちやをやつて、蟹を貰ひ、いつもの石垣へにがすのでありました。

蟹も八重子さんに、よく馴れて、八重子さんの顔を見ると、石垣から、澤山のこゝ這ひ出して来て、遊んでゐます。

八重子さんも、餌なご時々やつて、蟹をかはいがります。ですから、村の人々は、八重子さんのことを「蟹姫様」といふのでありました。

八重子さんが十七になつた時お母さんは、「八重さん、お前ももうお婿さんを貰ふ時が來ましたから其つもりで居なくてははいけませんよ」

と云はれますと。

八重子さんは、顔を眞赤にして、

「あらいややお母さんは、私そんな話恥しいのよ」とうつむいてしまひました。

お母さんは、

「眞剣な話しだから眞面目に考えておくれでないといけないよ」

とおつしやいました。

其後又お母さんは八重子さんを呼んで、

「あのお婿さんの話したがね、色々人にも探して貰つたのですが、村の與八さんがよからうとのこと、お前は何

とお思ひかね』

とお尋ねになりました。

村の與八さんは、親孝行で、正直で、其上働き手でありました。

しかし、見たところは大層見苦しいのです色が眞黒で、鼻が低くて、口が大きくて、齒が反齒、おまけに丈は大層低い。

八重子さんは少し考えて、

「與八さんでは、あんまりだわ』

といふので、無理に、とも云へず。其儘になつてゐました。

或日のこと、八重子さんのお家へ、年の若い立派なお武家が尋ねてこられ、お父さんに、會つて

「私は少し理由があつて、身分の程は今は明せないが、

私は武士が大嫌ひ、農家か町人の家に養子したい、と尋ねてゐたが、お宅で養子が欲しいとのこと私を貰つて呉れまいか』

と變つた話

「貴方のやうな立派な御武家何の不足は、ご座りませんが、娘に一寸相談して』

と八重子さんに、此事を話すと、八重子さんは物陰からそつと見ると、何とも云へない、氣高い立派なお武家、

八重子さんは顔赤らめ

「お父さんや、お母さんのよいやうに」

このこと、お武家に話しましたら、大層よろこんで、十日目の晩に来ると、約束して歸つて行きました。

お母さんは、ても不思議なお武家、ごの方面の人だらう。とそつと後をつけて行きますと、ごんく山の方へ急いで行くので、尙もそつと附いて行くと、谷の此方の森の中で、姿は不意に消え失せました。

とたんに五間もある大蛇一疋、目を光らせ、鎌首擡げ、谷間をさして入つて行きました。

之を見た、お母さんは、

『きやつ』

と云て、其場に倒れましたが、暫らくして、人心地つき、起上つてがたく、慄へながら家に歸つて来ました。

色眞青になつて歸つて来たお母さんに、事の理由を聞いて、びつくり仰天、それでは、さつきの御武家は、大蛇であつたか、飛んだ約束をした、と家中みんな慄へ上りました。八重子さんは、

「ほんとうに十日経つたら来るんでしやうか、私ごうしたらいゝでせう」と、毎日泣いてはつかり替りました。

日はだん／＼経つて、約束の日は近づいて来る。お父さんは、大工さんを頼んで、丈夫な箱を拵らへ、其日に

なつて、八重子さんを、其中に入れ、しつかり釘打ちにして座敷の、中央に置き、お父さんとお母さんは別な座敷の押入れの中に隠れてしまひました。

そして、約束のお武家の來ないやう、

神さまや、佛様を念じてゐました。

日は西山に傾いて、入合ひ告ぐる遠寺の鐘は、何となく物凄く聞ゆる夕間暮。八重子さんの家の門口に立つたは、以前のお武家は、

「お願い申す。」

と案内を乞ふも誰一人取次ぐ者は有りませぬ。

お武家は凄いい目であたりを見廻はしてゐましたが、や

がて、づか／＼と上に上り、

八重子さんの座敷に参り、あたりを見廻はし。物凄いい顔を、暫らく立つてゐましたが見る／＼姿は變り、五

間餘りの大蛇こなつて座敷中を、のたくり廻つてゐまし

たが、中央の箱に近付き、尾できり／＼と巻いては「ご

たん」「ごたん」こひつくり返す。

其度毎に中の八重子さんは、絹を裂くやうな金切聲で、

「ひー」「ひー」

別の座敷で、これを聞いた二親の心持はごんなであつたでせう。

此物音は夜中迄つゞき、夜中すぎに、

八重子さんの聲は、少しも聞えず、

只『ばたく』

こいふ物音ばかり、曉頃には何の音もしなくなりました。夜明けを待つて、二親は恐るゝ八重子の座敷に行つて見ますと、不思議や、大蛇は、のた打ち返つて、死んでゐます。

あたりには澤山の蟹が、泡をふいて鉢を上げてゐます。そして何百こいふ蟹はそこに死んでゐますので、初めて蟹が大蛇を殺してくれたのだ、こいふことが知れました。急いで箱の蓋をこち明けて、見ますと、八重子さんは、色青ざめて、息が絶えてゐました。

それからお醫者をお呼ぶやら、いろ／＼介抱するやらしてゐるうちに八重子さんは、幸にも息をふき返しました。お父さんやお母さんの喜びは、ごんなであつたでせう。八重子さんは、『立派な人はこり／＼だ』

こいひました。其後八重子さんは、與八さんと結婚して仕合せな月日を送りました。其時の蟹を葬つたところは蟹塚といつて今にのこつて居ると云ひます。

二、まゝ母の改心

昔 鎌倉の雪の下といふところに、藤六行光といふ刀

鍛冶がありました。

行光の子に、五郎といふ親孝行な子があつて何一つ不足なく、暮してゐましたが、五郎のお母さんは、早く死んでしまひましたので、お父さんは、後添へに、お秋さんといふ人を貰ひました。

五郎さんは、今度のお母さんにも、ほんとうのお母さんと、少しも變らず孝行を盡しますので、お母さんも大層よろこんで、

「五郎や、五郎や、」

と、可愛がつてゐました。

ところが、其後お母さんには、新太郎といふ子が生れ

ました。

五郎さんは、弟の新太郎を又可愛がつて、仲よくいたしてゐました。

月日がたつに従がつて、お母さんは、新太郎が可愛いくて、五郎が憎らしくなり、だん／＼まゝ子扱ひにするやうになりました。

しかし五郎さんは、今迄と少しも、かはらず孝行しました

たが、孝行すれば、するほど、憎らしいのです。或日徒らな、新太郎は、誰れもゐないのを幸に、戸棚の中から、しまつてあつたお茶菓子を出して食べてゐました。

不意に、人の足音のするのに驚ろいて隠さうとするは
づみに、手をすべらして、菓子入れの蓋を、下に落して
こわしてしまひました。

「しまつた」

と一人言をいつて、くつつけて見たが、くつつかない。
しかたがないから其儘上にのせておきました。

暫らくして、お母さんがお歸りになつて、

「新太郎やお前此菓子器の蓋をこはしたかへ」

「いゝへ」

そうだらう、お前が、こんなものをこはすきづかひはな
いと思つた。

「五郎お前知らないかへ」

五郎さんは、新太郎のこはしたことを知つてゐるから、
弟のために罪をきてやらう、と考へ「はい私がこはしま
した。

「だから、お前は憎らしい、といふのだ。」

「こわしたら、こわしたで、なぜあやまらないの、この
不正直者めが」

と、ぎゆつと、つめられるのでありました。

其後お母さんは、病氣にかゝられました。召し使ひの
人々や、隣の人達は、よいことに思ひましたが、五郎さ
んは心配して、夜もろくくねずに、介抱しました。

お母さんの病氣は、だんく重るばかりでいつなほり
そうにも思はれませんでした。

時はちようご、冬の中ばで、毎日雪がふり續いて、寒
さは身を切るやうであります。

五郎さんは、そんな寒いにもいとひなく、毎夜、人
の寢静まるのを待ちて、床を出で、まるはだかになつて、
井戸の水をかぶり、

「神様や、佛様、ごうかお母さんのお身体を早く丈夫に
して上げて下さい、私の壽命は、ちゞまつてもかまひま
せん。お母さんの病氣を、なほして上げて下さい」
と一心に、お祈りするのでありました。

お弟子の一人が、或夜此有様を見て感心し、翌日お母さ
んに話しました。

お母さんは五郎さんと呼んで、

「お前は毎夜、水をかぶつて、神様に何をお願いするの」

「別に何にもお願いはしません」

「そうだらう、云へまい、此お母さんが早く死ぬやうに、
願するだらう」

「いえ、勿体ないそんなことを。」

「えゝさうだく、ほんとうに憎らしい。」

と、其處にあつた鐵びんを投げつけました。

五郎さんは、頭をかゝへ、泣きながら逃げ出しました。

お母さんの病氣は、其後だんく、よくなりとうく元の身体になりましたから、五郎さんは、自分のことのように喜びました。

それから、お母さんは、五郎が憎らしくてたまらず。とうくご飯の中に毒をいれ、それを五郎に、食べさせようと思いました。

運よくも、五郎さんは、物陰から、それを見つけ、

「お腹が痛いから」

と云て、ことわりました。

お母さんは、大層おこつて、お腹が痛いなら、「二階へ上つて寝ておいで」

と、二階へ逐ひ上げ、五日も、ご飯を食べさせませんでした。

此まゝにしてゐては、死ぬより外仕方がない、ごうかして、助かる工夫はないかと、色々思案の末、とうく裏の柿の木から下に降り、其處を逃げ出し、叔父さんの處へいつて泣くく其話をしました。

叔父さんは、大層驚ろいて、お母さんのお父さんに此ことを話しますと、お父さんは、大層物堅い、お侍ですか、大層腹を立て、

「そんな女は、生かして置けん」と刀を下げて、飛び出しました。

五郎さんは、びつくりして、近道づたひにこけつ、轉びつ、家にかけつけ、此ことをお母さんに知らせました。其うちに、お母さんのお父さんは、刀を提げ目の色變へて、飛び込んでこられたから、お母さんは、

「あれいお父さんが気がちがつた、と逃げ出しました。」

お父さんは「うぬ逃してならうか」

と、逐ひかける。其うちに、お母さんは、物につまづいて、ばつたり、倒れました。お父さんは、刀をふり上げ、

「己れ」

と切りつけました。

此時五郎さんは、

「あぶない」

とお母さんの上にかぶさり、「ざくり」とばかり背中せなかに切り付けられました。

お父さんは、

「失策つた」

と、刀を投げ出し、色々介抱かいぼうしましたから、五郎さんは、息をふき反かへしました。

お母さんのお父さんは、お母さんに、ひごく、意見をせられましたので、お母さんは、涙を流して、今迄の悪かつたことをあやまり、「これから必ず心を改める」と、

誓はれました。

お母さんは、それから、生れ變つたやうなやさしい人となり、五郎さんを心から可愛がりました。

五郎さんは、それから、負傷もなほり、だんく成長するに従つて、立派な刀鍛冶になり、しまひには、五郎正宗といつて、日本一の、刀鍛冶になりました。

三、機織りお富

お富の町は戸數七百、漁業と機織りとが、此町の産業の大部分を占めてゐます。

お富には一人の一年の大半は、病床にある身体の弱い母と、浅吉といつて、酒呑みで、横着で、無頼漢の兄とが

あります。

お富は、尋常小學を優等で卒業し、町内の或機屋に工女として雇はれました。

今は進んだ機械機のことゝて、朝から、夜の九時頃まで、

「がちやく」

耳も塞がるばかりの騒がしさ。始めは頭が「がん」として、自分で自分がわからない位だんく慣れるに従つて勤めよくはなりましたが、工女の憐れさ、みじめさがつくく味はされる工場のことゝて、中々つらい勤めで、ありました。

お富は、年の若いに感心だ、と人に云はれる程の働き

振りで、其年の盆には、浴衣地二反の賞與に、九十餘圓の工賃を貰ひ、にこくともので、家に歸りました。母は、貰ひ物を見て、

「やれく立派な浴衣地だこと、や、これは大變、私は生れてから、これだけ揃つたお金を見たことがない」と心から喜ばれるのでありました。

お富の家は町内でも指折りの貧乏さで、工賃を見たお母さんのあきれものも、無理は有りません。●半年前からの拂ひ萬端をすまして、三十餘圓の餘りがありました。

かふした嬉しいお盆の中に唯一つの心配があります。

それは吞だくれの兄の歸らないことです。兄は漁夫ですが、前に云たやうな身持で盆や、年の暮れには拂ひが出来ず、かふして歸らないのが例でありました。

正月や、盆がすんでから、妹や、母の衣類なごを持ち出すことも、時々でした。

盆もはや、すんだので、お富は又も機屋へ行き工場の人となりました。

翌日の晩、店先きで、此家の奥さんと、泣きながら話して居る女があり、お富は何だか、気がゝりだったので、耳をそば立てゝみると、ごうやら母の聲らしい、店に出て見るとやつぱり母であつたので、思はず胸を轟せました。

聞けば今日兄が歸つて、残りの金を皆持つて行つたとのこと、

お富は、奥さんから戴いた、いくらかの小使錢をお母さんに上げて、いろいろと慰さめ家に歸らせました。

其夜寄宿舎では大騒ぎ、

「お富さんの男が下に立つてゐる」

お富に限つて、そんな不身持はない筈だ、と奥さんは云はれました。

奥さんと一しよに外へ出て見ると、頬かむりをした男が立つてゐるので、

「まあ」

と、あきれるやうに云て、恐るゝ近づいて見るとそれは、お富の兄さんでした。

「もう二十圓無ければ、ごうしても、世間に顔が出せないで、借して呉れろ、」

と、少しも動かないのであります。

奥さんに色々頼んで、先借りをして、兄さんに二十圓渡しました、

此事は一切お母さんにはいひませんでした。

それから、別に變つたことなく三年ばかりを過しました。お富さんは、いつも、各室の紙屑籠をしらべ、絲屑を取り集め仕事にあひくゝに結んではためて置きます。友達は、之を見て、

「お富さんの慾深にはあきれられるわ」と、そしり合ふのでした。

「たまつた絲屑が四圓に賣れたそうなのよ」

とは、誰れいふとなく工女のうわさの一つとなつた十日目のこと、新たに立てられた、公會堂の前には、寄附者の名が連書されて、中程に「一金四圓也 水野富」とありましたので、皆々感心だ、と譽めました。

魚會社の電燈の光は青白く長い光を海にうつし、岸べに打寄する浪の音は「ばさりく」何處かの犬の遠吼と交つて聞え、うす絹のようなもやは漁家の眠を静かにつゝんでゐる。

二三町沖に漁船一艘波にゆられ、人のさゝやきが時々聞える。

岸べに黒い影が四つ五つ、耳から耳にさゝやいて、やがてボートは沖の船にと近づきました。

暫らくすると、罵る聲、わめく聲、水に飛び込む音、續いて後から飛び込む音、なごかまびすしく、岸べに犬の吼る聲など打交つて、唯事でないことが知られました。

「いうべ舟で博奕がわれたそうなのよ」

との、うわさは、湯屋でも、床屋でも八釜しくあります。お富の兄さんも此仲間で、警察に引かれ其後金何圓の、罰金に處せられたが出金の見込なく、懲役に服すること

になりました。

お富は、今迄蓄へて置いた貯金を引出して、辨償したので、兄さんは、懲役のうきめをのがれ、家に歸ることが出来ました。

お富の真心は、この無頼の兄の心を立派に改心させ、正業に勵ますようにさせました。

其後お富は、相當の家に嫁つき楽しい月日を送りました。

◆軍人團の部

一、血ぞめの手帳

明治三十七八年、日露の戦争はだんく進み、豫備

後備の軍人は、次第に召集せられます。

こゝに、陸軍豫備上等兵、幾野敏夫は、命令一下、直に戦場に進み、天晴拔群の功績を立てやうと、日々待つて居りました。

幾野は、或工場の職工で、毎日通勤してゐます。

家には、賢一と云て、今年六つになる、子供がおります。賢一の母は二年前に死んで、今では、二人だけ、お父さんが工場へ行くときは、賢一を隣へ預けるのが例であります。晩に歸つて來るお父さんの顔を見て、

「お父さん」

と、すがり付くのが、たまらなく可愛く、ありました。

程なく召集の命は下りました。

「軍人として、戦争に行くは、年來の本望であるが、賢一には困った」

と一人言をいふのでした。

幾野は、色々考へた末、一そのこと賢一の寝てゐる間に
出立しやう、と決心して、いろく仕度に取りかゝり
ました。

いよく出立の曉方身仕度をして、賢一の枕邊に寄り
つくく其寝顔を眺め、太息をつき一人言、

「あゝ賢一は可愛想だ、二年前に母に死に分れ、今又私
に置き去られ、朝起きて、それと知つたら、ごんなに歎

くだらう」

何に驚ろいたか、賢一が急に目を醒したので、いそい
で逃げ出さうとすると、其足にすがり、

「お父さん、何處へ行く」

「おゝ目を醒したか、それなら云て聞かしてやるが、お
父さんはの、お國の爲に戦争に行くのだから、内におと
なしく、待ておいで、歸りには、おみやをたんと買つて
来て上るから。」

「いや、内には誰も居なくなるから、待つてゐること
はいや、坊も一所に行く」

「お前なごの行ける所ではない、こはい叔父さんが叱る

から、内に待つておいで」

「いや、行くならお母さんを呼んで来て」

と、頑是ない子供のせがみ、心は鐵石の軍人も親子の情

は、又格別、殊に身寄もないたつた一人の子供、さすが

の幾野も、もて餘してゐました。

折よく、友人の鈴木さんが來合せて、色々親切になだ

めすかし、一時預つて呉れることになりましたので、萬

事をたのんで、出發しました。

.....
幾野の屬する一隊は、敵の守つてゐる、小高い山の此方に陣取りました。

或日中隊長は幾野を招き

「お前に大切な役を命ずる、と云ふのは近い内に前面の

敵を攻撃しなければならん、其前に敵地の様子をこと細

かに調べておく必要がある。其斥候の役を命ずるのだ、

斥候の仕事は、六ヶしい、普通の戦は、力の有るだけ戦

つて、及ばん時には討死をするまでだが、斥候は先方の

様子を調べ、それを命令者に復命するまでは、任務が果

せないのだ、其心算でやつて貰ひたい尤も戦友と五人位

で行くがよからう。」

「はい幾野は、命を的に御役を勤めます。」

「うむ、しつかりやつて呉れい。」

其日の夕方、身仕度をした幾野は四人と共に隊を出た。空は一面に曇り、今にも雨が落ちさうであります。満洲の野を吹いてくる血なまぐさい風は一層物凄さを増し、時々敵の探照燈は、青白く光つて一行の人々を驚かせます。

五人は、だん／＼進んで、敵地近く行くところ、一川の川が流れてゐて、下流でせき止めてあるか水一ばいで、溢れさうになつてゐるので、すつと上流の、狭いところに廻り川を越し、いよ／＼敵陣近く進みました。其邊には、もう敵の哨兵がある、其目をぬすみ、間を通

り抜け、遂に山の裏に出ました。

折しも空は少し晴れて、おぼろ月夜となりましたので、月の光りで敵地の様子を手帳に書き止めながら、尙もだん／＼進みます。

とたんに現れた黒い影四つ五つ、何やら云て、とがめたが解らない。だまつてゐるのに益々怪しみ、大聲擧げて友を呼びました。

もうこれ迄と、手早く手帳を懐中に入れ、用意の日本刀を振り翳し敵中さして躍り込みました。

敵は次第に数を増し、それ逃すなど、おつ取り圍み、四方からひし／＼と攻め寄せます。

多勢に無勢、味方の五人は、圍の中に陥つて、だんく
分れくとなり、今は四人の人々は、ごうなつたのやら
解らなくなりました。

幾野は、多くの敵に取り圍まれ、獅子奮迅の勢に戦か
つてゐましたが、身に三四ヶ所の手傷を受け、とても叶
はなく思はれました。

「此處で死んでは、任務を全ふすることが出来ない、卑
怯なやうだが逃げられるだけ、逃げてやらう」

と隙を窺ひ逃げ出しました。
敵は大勢後逐けて來ます。川岸まで來て、素早く上着を
脱して水の中に飛び込みました。敵も大勢後から飛び込

む、しばらくは水中で苦闘を續けました。

向ふの岸に木がはえて、水にかぶさつて居るのを見附
け、水潜りして向ふ岸に着き顔だけ出して、隠れて居ま
した。

敵は暫らく探したが解らないので、

「もう死んだ者」

と思つて一同引き揚げてしまひました。

幾野はほつと一息、漸く岸に上つたが、深手の痛みに、
ばつたり倒れ、心勵まし立上り歩んでは息ひ、息ひては
歩み、七八町來た頃に、敵の撃ち出した彈丸のために背
より胸に打抜かれ、

「あつ」と一聲息絶えました。

中隊長は、幾野等の歸りが遅いので、四五人の兵士に云ひつけて、迎へに行かせました。行く途に「ばつたり」幾野の倒れてゐるのに突き當り。

「や、幾野君は、茲にやられてゐる。可愛想なことをしたなあゝまだ温みがあるやうだ。」

と、耳に口當て

「幾野君々々々」

と、呼ぶ聲心に通じたか、

「うむ」

と、云て息吹き反す。

「幾野君僕だ、しつかりし給へ、」

「うむ君は近藤君か、よう来て呉れた、嬉しい、」

「外の者はごうした」

「外の者は、生死の程も解らない、僕はこゝまで逃れて

来て、敵彈の爲に倒れたのだ……うむ、敵の様子は、これ此手帳、中隊長殿に渡して呉れ給へ、僕は死んでも、決して心残りはないと、中隊長殿に云て呉れ給へ」

「よし、心得た、君何か云残すことはないか」

「此期に及んで、別に言ひ残すことはないがね、故郷には、一人の賢一と云ふ子供が、友人の家に預けてある、僕の歸りを、今かくと小供心に待つてゐるが、僕の戦

死を聞いたらごんなに悲しむだらう。賢一は二親共無くなつて、外に寄るやうな身内はないのだごうか何分頼むよ。」

「心配し給ふな、きつと僕等が引き受けた」

「それで安心、ごうか日本の方角をむけて、立たして呉れ給へ、せめては、死ぬる今わに大元帥陛下の萬歳が唱へたい」

「よし………それこれが日本の方角だよ」

助けられて、立上つた幾野は、

『大元帥陛下萬歳』

と唱へ終つて、息が絶えました。

向ふの森では梟が物さびしく鳴いてゐます。

二、聯隊旗の行衛

明治十年、西郷隆盛は、部下の人々に擁せられて、兵

を九州に起し、だん／＼熊本城に迫つて來ました。

熊本鎮台司令長官、陸軍少將谷干城は、其頃、小倉聯隊長であつた、乃木少佐に命じて、其兵を熊本城に納れさせました。

二月十四日に急行して其兵の大部分を城に入れましたが、まだ餘りの兵がありましたから、熊本から、小倉に歸り、兵を率ひて、熊本城に向ひました。

敵は名におう、薩摩隼人、隆盛の部下で、ありますから、

中々油断は出来ません。少佐は其覺悟して、だんく城
近く進まれました。

敵は、植木といふところで、少佐の軍を等ら構へてゐ
ました。

「それ」といふので、鋭、手向ひした。少佐部下
を勵まし、勇ましく戦ひましたが敵は大勢、味方は小勢、
到底敵し難いと思はれましたから。

旗手の河原林少尉に、

「軍旗を捲て背に負へ」

と命じ、尙も勵しく戦はれました。

そして、千本櫻といふ處に集まり、人員を調べました

とき、さあ大變、大切な軍旗を持つてゐた、河原林少尉
の姿が見えませんが、

少佐は此時、聲を勵まし、

「若し軍旗を失つたならば、何の面目あつて歸ることが
出来ようや、私は命を捨て、軍旗を取り返すのである、
私と志を同じくする者は共に進め」

と、はや、馬を進めやうとせられました。此時部下の人
々は、泣いて少佐を止めて曰はれるには、

「今未だ少佐の死なれる時ではありません」

と、馬の轡を、はなしません。

少佐は涙を揮つて、兵を収めて退かれた。翌日、復敵

と勵しく戦ひ、馬は疲れて、自由に動かなくなり、
から、他の馬にのり換へました。その時敵の彈丸飛んで
馬に當りましたので、馬は驚ろいて走り出し、間もなく
馬は斃れました。そして少佐は地に墜ちました。

敵兵はこれを見て銃劍を揮つて迫り、少佐は奮戦して
これを退けました。

其後數度の戦に目覺しく奮闘せられました。が遂に敵彈の
爲に左足に負傷して久留米病院に入られました。

病院に居られても、唯氣にかゝるのは、軍旗のこと、
さうして徒らに病床に日を過すことが出来やうぞ、と、
傷のなほらない内に病院をぬけ出して戦地に出られまし

た。それから、脱走將校の綽名がついたのです。

少佐は軍旗を失つた時、山縣參軍に向つて進退伺ひを
出されたのに、參軍は其伺書に、朱書で、其議に及ばず
と認めて返還されたさうである。

此軍旗紛失のことは、乃木將軍が其以後、忘れること
の出来なんだ責任感であつたといひます。

◆敬老會の部

一、清水の觀音

世に、三つの尊者、と申しまして、三つ尊い者がござ
います。第一は位高い人、上天皇陛下を始め奉り官位の
高い方々國家の役人なごであります。これはさうしても

我々が尊び敬はなければならぬ人々であります。

又一つは、智徳の高い人、智識や、徳行に秀で、人々の師表となるやうな方々、これも尊び敬はなければ、ならない人々であります。

又一つは、年高い人と、申しまして、貴方方のやうにお年寄の方々、これも尊び敬はなければならぬ人々であります。

なぜお年寄が尊いか、申す迄もなく、此やうに、開けた、有がたい、結構な世の中に、我々が、日暮しをさして戴くことの出来るのは、上天皇陛下のお蔭であります。一つには前代の國民、即ち今のお年寄が、汗水垂らし

て、働らいて下さつた其お蔭によるのであります。其上

お年寄は、世の中の一切の事柄をお過しになり、何事も経験せられた、立派な我々のお師匠様であります。

ごここから考へましても、お年寄は尊び、大切に致さねばならないのであります。

世の開けない昔には、姨捨て山、なご申し、お年寄を粗末にした、物語なごものこつてゐますが、今は世の中が開け進みまして、道理に明るくなり、こうした敬老會なご、云ふ、結構な會が、催されました、お年寄をいたはり、お手本にするといふことが、此處でも彼處でも行はれます。眞に喜ばしい次第ではありませんか。

若いものは、かうしてお年寄を敬ひ、お年寄は若い者を導き、後々家が榮るやう、國がよく治るやう、天皇陛下の御世が萬々歳であるやう、お心がけ下さることが大切であります。死んでからは、ごうでもよい、といふのでは、立派な日本國民とは申されません。

忠義の神と敬はれます、楠正成公は、死ぬる今わに、七度人間に生れ變つて、天皇陛下のおん爲、國家の爲に、賊を亡ぼしたい、と申されました。

桓武天皇の御世の名將で、大忠臣の坂上田村麿將軍は一生の間、天皇陛下の爲、國の爲に、命も惜まず働かれましたが、死ぬる今わに「死んでも王城を守護する」

と云はれましたので、其死骸を王城に向はせて葬り、王城守りの神とせられました。

此お方は又、佛教信者でありまして、有名な京都清水の観音様をもお建てになつたのであります。今から少し此観音様の由來を申し上げませう。

昔、大和國小島寺に、延鎮といふ坊さんがありまして、深く観音様を信仰せられ、常に
 正眞の觀世音菩薩が拜みたい、
 と念じてをられました。

或時観音の夢のお告に、
 「正眞の観音を拜まんとならば、山城國愛宕郡へ行へし」

とのことで、ありました。

延鎮和尚は喜こんで出立し、だんく進んで、木津川のほとり迄行かれましたとき。不思議や、流れのまにに金色の光明があらはれますので、それをしるべに流れに添つて川上にのぼられますと、こゝに一つの山があります。して、其山へ上られますと、一つの柴の庵があります。見れば一人の白髪の老人が居られて、

「めづらしや延鎮、汝を待つ事年久し」

と云はれますので、見も知らぬ翁の我名をしられるは只人ではあるまい、と名を問はれますと、

「我は行叡居士といふものである、此山に年久しく住ん

で、汝を待てゐたが今逢ふことの嬉しさよ、此處こそ觀音の靈場である、又この柳は太古よりの靈木である、汝此木を伐つて千手觀音を刻み敬はゞ後堂宇建立の大檀那あつて末世廣大の靈場となるであらう」と、告げられたかと思ふと、不思議や姿は、忽然として消えました。

延鎮和尚は、有難い事に思ひ、其庵にこもり、柳をきつて、千手觀音の像をきざみ、日夜禮拜供養いたされました。

其頃坂上田村麿の奥方お懷妊で、十月も過ぎ、十五ケ月に及んでも、生産の模様がなないので、皆々深く心配せ

られ、其頃唐土から来て居られた、名醫の診断を願はれました。

「これは、懷妊ではなく、懷腹といふ病である、女鹿の生膽をとつて呑む時は忽ち病氣は平癒する、」

と、いひましたので、田村將軍は、自身に鹿を射止めやうと、音羽山に入つて、狩をなさいました。

しかし、女鹿は一疋もありません、將軍は奥深く尋ね入り一つの庵に修行僧のあるのを見不思議に思つて立止ま

られました。此修行僧は、前申した延鎮和尚であつたのです。

「貴下は、ごうして、狩を遊ばすのですか」

と、問ふに、將軍は、

「我は坂上田村麿といふ者であるが、無益の殺生を好んで、狩をするものではない、實は妻女が懷妊と思つたのに、さわなくて、唐土のくすしの、言葉によれば、懷腹といふ病で、女鹿の生膽を取つて呑ませねば、此病氣平癒覺束なしといふに、我は此通り狩をするのである」とことこの次第を話されました。

延鎮和尚將軍に向つて、

「それは、不思議なことを承ります、人間の病氣を治するに、物の命を取るとは、其意を得ませぬ、我は觀音の大悲にすがつて、貴下の奥方の御病氣平癒を祈りますすれ

ば、狩は思ひ止まつて、館へお歸り遊ばせ』

と申されました。將軍も亦、物の情を知る人でありますから、げにも、

と思ひ館に歸られました。

延鎮和尚は、直に一心こめて観音菩薩を念じられます

と、不思議や、三日目に、いとやすくと、玉のやうな

男子出産になりました。將軍夫婦の喜びは此上なく、直

ちに將軍自ら、庵に至られて、あつくお禮を申されまし

た。

そして、此お禮には観音を安置すべき、堂宇を建立しや

うとのこと、延鎮和尚は、

「さらば居士が、後に堂宇建立の大檀那あらんと申され

たが、將軍のことなりしか」

と、無上に喜ばれました。

しかし、此山は、峨々たる岩石ばかりの山ですから、

伽藍を建てる地としてはありません。建立の土地のおんさ

しづ受けやうと、

延鎮、將軍共に観音のお前に、通夜なさいました。

其夜、深更に及んで、不思議や、俄に山鳴り、震動す

ること夥しく、庵も爲にくづれんばかりでありました。

夜明けて、あたりを見れば、こはそも如何に岩石盡く、

くづれ落ち一面の平地となりました。

延鎮 將軍、有難さ肝に銘じ、將軍は、人工と金をい

とはず七堂伽藍を建立して、

觀音菩薩を安置なさいました。

これが今の京都清水の觀音様であります。

二、お釋迦様と提婆

月にむら雲、花に風といつて、世の中には皆それぞれ

對する敵があります。

世界三大聖人の一人で、佛教の開祖、三界の大導師と

仰がれるお釋迦様にも、提婆といつて、えらい敵があつ

たのです。だから我々には常に色々な敵があつて、邪魔

をいたします、それで何事も思ふ様には出来ません。

貴下方のお家にも、時には、思ふやうにならないこと

もありませう。

若い人達が思ふやうになつて呉れない場合も、有りませ

う。しかしこれは、憂き世の常と諦らめて、罪を造らな

いやうに日暮しがしたいものです。家康公の訓へにも

『不自由を常と思へば不足なし』

とあります。何事も諦めが肝要であります。

提婆といふ人は、お釋迦様の身うちで、お釋迦様が悟

をお開きになつて、お在所の迦毘羅衛城に歸られ、説法

せられた時、阿難、優婆離、阿菟樓多、等いふ人々と一

所に、お釋迦様のお弟子になられた人であります。

此人は、至つて負けぎらひで、強情で、野心の強い人でありましたから、外のお弟子と同じやうなことをしてゐるのを好みません。自分一人偉い者だと云はれたい云ふ心から、殊更ら六ヶしい戒法を考へ出し、この戒法で外のお弟子達を取りしまりたい、とお釋迦様にお願ひしました。

ところが、お釋迦様は、其心をご存じだから「それは宜敷くない」とお許可になりませんでした。

すると、心のよくない提婆の事でありますから、大層怒りまして、

「それなら此方にも覺悟がある」と、直にお釋迦様の元を去り味方を集めて、復讐の折を窺つてゐました。

同じ印度の中の摩訶陀國の王様は、頻婆沙羅王と云つて、熱心な佛教信者でありました。其王様の子に阿闍世太子といふのがありましたから、提婆は、この太子に取り入つて、事をしやうと思ひつき、種々の學問や、武術を教へて、其信用を得ることに力めました。

それには先づ、父と太子との間を仇同士にしやうと色々計略を廻らしました。

此太子の生れた時のことについて、不思議な言ひつたへ

があります。

太子が、母の胎内にあつた時のこと、母の葦提希夫人は、夫、頻婆沙羅王の右の足の血が飲みたいといふ、不思議な病氣に罹りました。

餘り不思議な病氣だから、或仙人に卜はせました。仙人は、「之は胎内のお子が王様と仇同志である、だから出生して、成人の曉はきつと、王様を殺して自立するであります、せう、」

と申しました。

父王はこれを聞かれ、「親が子に殺されるのは致し方がない」

と、あまり心にも懸けられませぬ。

お母様の葦提希夫人は、大層心配して、生む時、死んでしまふやう、刀の上に生み落しました。しかし太子は小指一本切り落したばかりで、生命には別條ありませんでした。

提婆は、この話を利用して志をなさうと思ひ

「父王はあなたの生れる時、あなたを殺さうとなさつた程だから、あなたに位を譲られる氣遣ひはありません。今のうちに父王を殺して、自立なさつた方がお爲です。」と言葉巧みに、太子に説きつけました。

太子は遂に提婆の言に迷はされ、父王を殺さうと決心

し、父王を捕へて、七重の牢屋に入れ、食物を與へず餓死させやう、としました。

葦提希夫人は、王の難を救はうと、こつそり少しづゝの食物を送つて王の死なれないやうにしてゐられました。

太子は、それと知り、夫人をも捕へて、斬り殺さうとしたのを、大臣の諫めによつて、殺すのを止め、同じく牢屋に入れてしまひました。

お釋迦様は、これを憫み牢屋の前に來られ、未來に於て助かる道を説かれました。

この時説かれたのが、觀無量壽經で、他力念佛宗の源であります。

其後瀕婆沙羅王は、無慘にも牢屋の内で餓死され、阿闍世太子は目的通り、自立して、王となりました。

提婆はいよく、お釋迦様を殺すつもりで、阿闍世王の大象をかり、これを放つて、お釋迦様を踏み殺させやう

としてやりそこなひ、悪人にいひつけて斬り殺させやうとしてなしとげず、提婆自ら、崛山に登り、お釋迦様の

通られるのを待つて大石を投げ落したのが只僅に足の指に傷を負はせたばかりで、目的が達せない、いましくしい

がつのつて病氣になりました。

強情な提婆は、未だ心にあきたらず思つてごうしても初めの目的を達しやうと、刀を懷に隠し、病氣の身を強

ひて輿こしに乗り、祇園ぎん精舎しやうしやに行つて、説法せつぽう中ちゆうのお釋迦しやくか様さまを

刺さし殺ころさうとしました。

其門そのもん前ぜんまで行つたとき、喉のどが渴かいてたまらないので、輿こし

から出でて、傍そばの池いけの邊へんまで歩いて行つたが、遂ついに水すい中ちゆうに

墜落つひらくして、敢はかない最後さいごを遂ついげました。

説法せつぽう中ちゆうのお釋迦しやくか様さまは、其時そのとき涙なみだを落おし、

「今提婆いまだいばは地獄ぢごくに落おちた、かはいさうにや永ながく其苦患そのくげんは

まぬかれぬ。」とおつしやいました。

三、愛あいの草くさだね

此中このなかには、佛ぶつ教けふ信者しんじやの方かたが多おほからうと思おもひます。我々われわれ

お互たがひは、毎日まいにち欲よくの泥水どろみづ深ふかく沈しづまうくとしてゐるのを佛ほとけ

様さまは救すくはう助けやうと御心ごしん配はい下くださる、お互たがひは中々なかなか此助このたすけ

の舟ふねには乗のうとせず。益々ますます深ふかみへ沈しづんで行く、煩惱ぼんノウの賊そく

の手ては、我々われわれを捕とらへやう、虜とりこにしやうとねらつてゐるの

に我々われわれは心こころつかず日暮ひぐらしてゐます。佛ほとけは此有このあり様さまを悲かなま

れ、泥水どろみづに沈しづんでも、煩惱ぼんノウの賊そくに虜とりこになつても、遂ついに助たす

かる道みちを説ときのこされたのが佛ほとけ法ぽうであります。

此道理このどうりをわかりやすく知らせる面白おもしろいお伽噺えんばなしがあります。

昔むかし南みなみの方ほうの或國あるくにに、黄金草こがねくさといつて、根ねも、莖くきも、

葉はも、花はなも、實みもみんな金色きんいろした二三寸にさんすんばかりの草くさの生は

える處ところがありました。此草このくさの生はへ揃そろつた時は、まるで黄

金を敷きつめたやうに見事でした。

其草のある近くに、ハルマーといふ一人の小供がありました。ハルマーは、早くお父さんに死に分れ、お母さんと二人だけで毎日我儘に育つてゐました。

何をいひつけられても小言をいふのでありました。

何を貰つても不足をいふのでありました。けれどもた

つた一人だけの子供ですから、お母さんは、ハルマーが可愛くてくたまらないのでした。

或日のことお母さんは、

「これ、ハルマーよお母さんは今日河に洗濯に行きますから、おとなしく待つてゐるのだよ」

「いやだく僕もついていく」

「いけませんよ、あの高い山の奥には人取り泥棒が居て時々小供を捕へて行き、遠いく國に奴隷に賣つてしまふとのこと、此泥棒につかまつたら、もう家には歸られませんよ、だから、うちにおとなしくして待つてゐねばいけません」

「いやく〜く〜」

「仕方がないねそれでは、ついてお出で」

お母さんはハルマーを連れて、河の岸に來ました。

「ハルマーあれごらん、あんな美しい魚が泳いでゐますよ、あれを見て遊びなさい」

「いや／＼／＼魚なんかいやだ」

「仕方がないねいお前にも困つてしまふよ」

「それではかうおしよ、それ此邊の土の中に、………ほらこんな美しい小石があるよ、これは金の小石ですよ」と拾つて見せますと、ハルマーは興に入り、

「此處にもある彼處にも」

と、しきりに拾つてゐますから、母は此間にと、一生懸命洗濯にかゝりました。

暫らくして洗濯も終りましたから、

「ハルマーよ、もう洗濯がすんだから歸るのだよ」

「いやいや／＼、もつと拾ふ」

それでは早く歸るですよ、お母さんは、先へ行きますから、と心を残してお母さんは歸りました。

あとに残つた、ハルマーは、しきりと金の小石を拾つては、ポケットに入れてゐます。

折しも山の方から、怪しげな頭巾をかむつた人取り泥棒、無中に小石を拾つてゐる、ハルマーに近づき、不意に首筋を押へました。びつくりして聲を立てやうとする間に早くも持て来た袋をかぶせ、横だきに抱へ山奥さしてごん／＼行きます。

ハルマーは、恐ろしさに聲も出し得ず、山奥深く連れて行かれるのであります。

「ハルマーは我々梵夫、母は佛、賊は煩惱、ハルマーの持つてゐる金の小石はお助けの御法であります。」
 何か助かる工夫はないか、としきりに、ハルマーは考えてゐます。ふと見ると袋に小さな穴があいてゐるので、そこから外を見ると、ごここをどう行くのか解らない程の道であります。

「これでは、萬一逃げ出すことが出来ても道がさつぱり解らない何かよい道知るべはないかなあ、」
 と、しきりに考えてゐますと、拾ひためた金の小石の事を思ひ出し、

「よしこれだ、此小石をところ／＼に落しておけば、金

色だからすぐ知れる之をたよりに歸れないことも無からう、」

と、ばらり／＼少しづつ落しては連れられて行きました。泥棒は漸く住家につき、仲間の者と何かしきりに囁いてゐます。

其夜逃げ出さうとしたが、泥棒達の真中に寝させられとう／＼逃げられませんでした。其翌日は大雨ふり、ごつといふ大水出

「あゝなさけない、此大雨で金の小石も埋つたらう、逃げだしても歸る道が解らない」
 と、がっかり力を落してしまひました。

それから七日目の晩、今夜はいつになく泥棒達が皆よく寝てゐるのでハルマーはそつと床をぬけ出て、息を殺し室の外へ出る事ができました。

『ほつ』と一息、忍び忍んでとう／＼外まで出て空を仰げば一面晴渡り、月は皎々と輝いてゐます。やれ嬉しや、久し振りて美しい月が見られた、が雨の前なら金の小石で道が解らうが、あの大雨では其姿もあるまい、それでは道も解るまい、とふと見ると、何だかびか／＼光る物がある、よく／＼見ると高くなつてゐる様子、尙よく見れば黄金草でありました。向ふにも、其向ふにもはえてゐます。

「それでは、先日落したのは、金の小石でなくて、黄金草の種であつたか、それで先日の雨でこんなに芽を出したのか、やれ嬉しやと嬉し涙、だん／＼黄金草を便りに山道を通り広い道に出ることが出来ました。

それかららは知つてゐる道ですからざん／＼急いで家に歸りました。

お母さんはハルマーのなくなつてから、もう助らないもの、力を落とし毎日病人のやうになつて泣いてはつきり居られました。

急にハルマーの歸つたのを見て、夢ではないかと飛んで起き、ハルマーに抱きついて、言葉も出ません。